五ヶ庄二子塚古墳昭和63年度発掘調査概報

（宇治市埋蔵文化財発掘調査概報　第13集）

1989

宇治市教育委員会

後円部残丘と基礎礫群（62-1 トレンチ）

(1) 62-1・63-1 トレンチ全景（南から）

(2) 63-1 トレンチ全景（北から）

(1) 63-2 トレンチの裏込め土と基礎礫群（北から）

(2) 63-2 トレンチ完掘状況（北から）

序

宇治市教育委員会では、昭和62年度より文化庁より国宝重要文化財等保存整備費補助金を、京都府から文化財緊急保存費補助金の交付を受け、市内に存在する重要な遺跡や緊急に保護しなければならない遺跡に対して、計画的に発掘調査を行い、その保護・保存に必要な資料の充実を図ってゆくこととなりました。

本年度は、その２年度目であり、昨年に続き市内最大の前方後円墳である二子塚古墳の発掘調査と基礎資料となる地形測量とを実施しました。

今回の発掘調査では、昨年その一部を発見しました石室の基礎部の範囲や具体的な構造を確認をし、かつて存在した石室の復元に大きな手がかりを得ることができました。

本書は、この発掘調査成果をまとめたものです。本書が多くの方々の目にふれ、広く宇治の歴史を知る機会となり文化財保護に役立つことを願うものです。

最後になりましたが、調査にご理解とご協力をいただいた土地所有者の方を始め、調査にあたりご指導を賜わった関係機関ならびに各位、そして調査に従事していただいた方々に対して心よりお礼を申し上げます。

平成元年３月

宇治市教育委員会
教育長　岩　本　昭　造

例　　言

1、本書は、昭和63年度宇治遺跡群発掘調査事業として実施した五ケ庄二子塚古墳の昭和63年度の発掘調査概要報告書である。

2、本書が収録する遺跡の概要は次のとおりである。

名　　称	種　　類	時　　代	所　在　地	調　査　期　間
五ケ庄二子塚古墳	前方後円墳	古墳時代後期	宇治市五ケ庄大林	昭和63年11月～ 平成元年３月

3、本事業費は5,000,000円であり、文化庁から国宝重要文化財等保存整備費補助金としてその1/2を、京都府から文化財緊急整備費補助金としてその1/4を得た。

4、本発掘調査事業の組織は下記のとおりである。

調査主体者	宇治市教育委員会		
調査責任者	宇治市教育委員会	教育長	岩本昭造
調査担当者	同	社会教育課　主事	杉本　宏
	同	嘱　託	猿向敏一
調査事務局	同	参　事	頼成綾子
	同	社会教育課　課長	小山豊嗣
	同	社会教育課文化係長	吉水利明
	同	社会教育課　主任	小西弘子
	同	社会教育課　主事	梅田正人

5、本発掘調査実施にあたっては、下記の方々よりご教示を得た。

京都府教育委員会、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、京都府立山城郷土資料館、万福寺文華殿、宇治市歴史資料館、中谷雅治・奥村清一郎(京都府埋蔵文化財調査研究センター)、平良泰久(京都府教育委員会)、高橋美久二(京都府立山城郷土資料館)、和田晴吾(立命館大学)、中島正(山城町教育委員会)、〔順不同、敬称略〕。

6、本発掘調査事業の参加者は下記のとおりである。

調査補助員……内田貴則

調査整理員……梅田恵子、大前朋恵、岡本真由美、志村みどり、山岡万里子、堀美津代

調査作業員……稲木富三郎、小川七郎、小山光男、沢井　勇、高山一夫

7、調査を実施するについては、土地所有者である西方寺のご理解をいただくとともに、住職の藤原了孝氏を始め総代の河村信雄・太田　勇・関　健治・岸村　栄の各氏にはご協力を賜わった。

8、本書収録の写真は、主に猿向敏一と内田貴則が撮影をした。

9、本書の執筆分担は下記のとおりである。

杉　本　　宏……1・2・3・6各章

猿　向　敏　一……4・5各章

10、本書の編集は、宇治市教育委員会社会教育課が行い、実務を杉本宏が主担当し猿向敏一がこれを助けた。

本　文　目　次

1．はじめに…… 1
2．位置と環境…… 3
3．調査の経過…… 9
4．遺　　構……11
5．遺　　物……23
6．まとめ……27

挿　図　目　次

第１図　五ケ庄二子塚古墳周辺の主要遺跡（１：50,000）…… 2
第２図　五ケ庄二子塚古墳と周辺の地形…… 3
第３図　五ケ庄二子塚古墳周辺の地籍図…… 4
第４図　大正年間出土の埴輪…… 5
第５図　五ケ庄二子塚古墳昭和46年測量図…… 6
第６図　外濠出土の須恵器…… 7
第７図　「万福寺山内古図」に描かれた西方寺と二子塚古墳…… 8
第８図　昭和62・63年度トレンチ配置図……10
第９図　墳丘及び検出遺構全図……10―11
第10図　62―１トレンチ実測図……13
第11図　63―１トレンチ実測図……14
第12図　63―１トレンチ断面実測図……15
第13図　63―２トレンチ実測図……17
第14図　63―２トレンチ断面実測図……18
第15図　基礎礫群実測図……18―19
第16図　墳丘盛土の土色検出状況……20
第17図　地山断面実測図……21
第18図　埴輪実測図……23
第19図　西方寺に残る石室使用石材……26
第20図　二子塚古墳の石室構築方法想定図……28

第21図　市尾墓山古墳石室下部の構造……29
第22図　二子塚古墳墳丘縦断面模式図……30
第23図　横穴式石室構築方法の２例……31

参考史料目次

一、『殿　　暦』……一(40)
二、『台　　記』……一(40)
三、『山城名勝志』……二(39)
四、『山城名跡巡行志』……二(39)
五、『京都府史蹟勝地調査会報告』第四冊……三(38)
六、『山城国山科郷古図』……五(36)
七、『都名所図会』……六(35)
八、『明治27年１万分の１仮製図』……七(34)

図　版　目　次

原色図版第１　後円部残丘と基礎礫群(62―１トレンチ)
原色図版第２　(1)　62―１・63―１トレンチ全景(南から)
　(2)　63―１トレンチ全景(北から)
原色図版第３　(1)　63―２トレンチの裏込め土と基礎礫群(北から)
　(2)　63―２トレンチ完掘状況(北から)

図版第１　二子塚古墳航空写真(昭和57年)
図版第２　(1)　宇治川と宇治東部(菟道小学校より北を望む)
　(2)　二子塚古墳遠景(明治天皇陵から南を望む)
図版第３　(1)　二子塚古墳全景(南西から)
　(2)　二子塚古墳西側内堤(南から)
図版第４　(1)　二子塚古墳東側の現状(南東から)
　(2)　二子塚古墳の石室に使われていた石材(西方寺本堂裏)
図版第５　(1)　伝二子塚古墳出土鏡(四乳四獣形鏡)
　(2)　大正年間出土の埴輪(京都大学蔵)

図版第 6　62—1トレンチ全景(南から、昭和62年度調査)
図版第 7　62—1トレンチ基礎礫群(北から、昭和62年度調査)
図版第 8　(1) 62—1トレンチ基礎礫群検出状況と後円部残丘(北から、昭和62年度調査)
(2) 62—1トレンチ基礎礫群掘方北端部(西から、昭和62年度調査)
図版第 9　(1) 調査前の状況(東から)
(2) 同　上(西から)
図版第10　(1) 完掘状況(西から)
(2) 63—1・62—1トレンチ完掘状況(南から)
図版第11　(1) 63—1トレンチ調査風景
(2) 63—1トレンチ表土除去状況(北から)
図版第12　(1) 63—1トレンチと62—1トレンチの関係(北から)
(2) 同　上　(南から)
図版第13　(1) 63—1トレンチの基礎礫群・裏込め土・墳丘盛土(北から)
(2) 63—1トレンチの基礎礫群(北から)
図版第14　(1) 63—1トレンチの基礎礫群(南から)
(2) 63—1トレンチの基礎礫群掘方の北西隅部(西から)
図版第15　(1) 62—1トレンチ作業風景
(2) 63—2トレンチ作業風景
図版第16　(1) 63—2トレンチ表土除去状況(南から)
(2) 同　上　(北から)
図版第17　(1) 63—2トレンチ撹乱土除去状況(南から)
(2) 同　上　(北から)
図版第18　(1) 63—2トレンチの撹乱された礫群状況(南から)
(2) 同　上　(北から)
図版第19　(1) 63—2トレンチ南部の撹乱された礫群状況(東から)
(2) 63—2トレンチ北部の撹乱された礫群状況(北から)
図版第20　(1) 63—2トレンチの基礎礫群と掘方(南から)
(2) 同　上　(東北から)
図版第21　(1) 63—2トレンチ北部の基礎礫群上面検出状況(北から)
(2) 同　上　(東から)
図版第22　(1) 63—2トレンチ掘方北東隅部の基礎礫群の断ち割り(東から)
(2) 同　上　(北から)

五ケ庄二子塚古墳

1. はじめに

五ケ庄二子塚古墳(以下、二子塚古墳という)は、宇治市五ケ庄大林の西方寺境内に現存する大型の前方後円墳で、古墳時代後期のものとしては京都府下最大級の古墳である。

古墳は、現在、墳丘部分が竹藪となっており、墳丘の西・南側に周濠と堤の一部が遺存している。墳丘の北及び東側の周濠と堤部分については、工場や家屋そして京阪電鉄宇治線の鉄道敷があり、旧状をほとんど留めていない。墳丘についても、後円部が大正年間に土取りにより破壊[註1]されており、現在は前方部のみが往時の姿を留めている。昭和60年の夏、前方部南西側の堤外方の調査[註2]で、本墳には現在に残る濠の外側に幅12m程のもう一重の濠、すなわち外濠がめぐるらしい事が判明した。外濠は完全に埋没しており、現在は宅地や茶畑となっているが、西側では土地割りなどから、その範囲を概ね推定できる。

このように、二子塚古墳は、古墳時代後期の大型前方後円墳であるとともに、本格的な二重周濠を備える完備した古墳ではあるが、その具体的内容を確認するための調査は実施されてこなかった。近年、古墳周辺部分での開発が進むなかで、本市教育委員会は、本古墳の保護のため、早急にその具体的内容を把握する必要を認め、昭和62年度より継続的に本古墳の調査を実施することとなった。今年度は2年度目となる。

今年度の調査は、昨年度の発掘調査[註3]で検出した後円部中央付近の礫群の範囲と性格を確認することを主目的に発掘調査を実施した。調査は、竹根に阻まれ、かなり厳しい状況の中で実施をしなければならなかったが、一応、当初の目的は達することができたと考える。

発掘調査の成果については後述をするが、後円部中央に存する礫群は、かつて存在した横穴式石室の基礎であり、その範囲は、東西約19m、南北9mにも及ぶ巨大なものであることが判明した。すでに消滅した石室の規模や開口方向について、この基礎部分の検出から一定の判断が可能になった点において、大変貴重な知見を得ることができた調査であったといえる。

また、発掘調査と合わせて本古墳と周辺部分の測量及び図化を実施[註4]した。これは、従来の測量図が昭和46年の宇治市史編纂時のものであり、発掘調査で検出する遺構と墳丘図とが整合しないため、新たに周辺地形をも含めた測量図を作成し、本古墳の墳丘及び周辺地形と発掘調査成果とが統一的な測量点から計測できるようにしたものである。この測量成果については、次年度に報告をしたい。

今回の調査を実施するについては、土地所有者である西方寺をはじめ、西方寺総代各氏、または関係機関・各位より多くのご協力・ご指導を得た。記して感謝を申し上げる。

第1図　五ヶ庄二子塚古墳周辺の主要遺跡（1：50000）

2. 位置と環境

（二子塚古墳の位置）

二子塚古墳の所在する五ケ庄大林付近(岡屋)は、ゆるやかに西に向って低くなる沖積台地となっており、二子塚古墳付近の標高は21～28m 程となっている。古墳の西400m には宇治川が北流し、北１km あたりには山科盆地を南下してきた山科川が流れている。宇治市域の宇治川東岸部分を我々は宇治市東部と呼んでいるが、二子塚古墳の位置するところはその中でも北端部分にあたり、山科盆地と接する地域である。

宇治川の西側にはかつて巨椋池と呼ばれる巨大な淡水湖が存在していた。湖は昭和16年の干拓終了によって現在は水田と化した。二子塚古墳は、この巨椋池に主軸を平行にして築造されており、墳丘頂からは、今でもかつての巨椋池を通して対岸の向日丘陵・男山丘陵そして北摂津の山丘を望むことが可能である。

近くの遺跡には寺界道遺跡・宇治郡衙推定地・木幡古墳群がある。寺界道遺跡は二子塚古墳の南側に広がる縄文から平安時代に至る集落跡であり、昭和60年にその一部が調査[註5]されて

第２図　五ケ庄二子塚古墳と周辺の地形

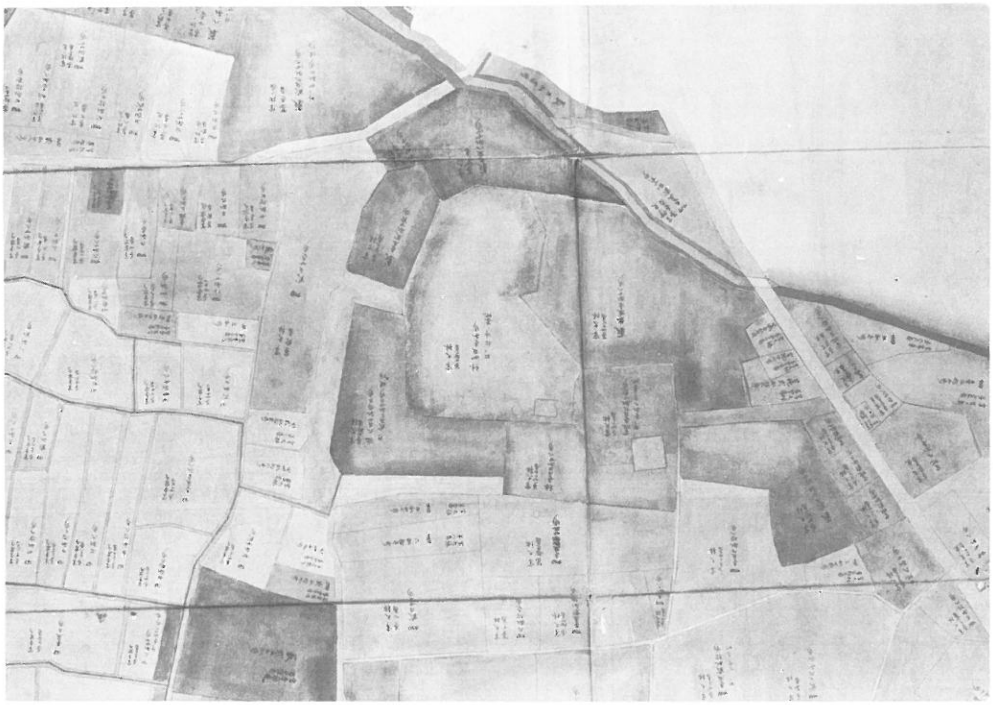
いる。宇治郡衙推定地は古地名からその存在が推測[註6]されているところであり、土器片、古瓦片を採集できる。また、木幡古墳群は、二子塚古墳東方の丘陵上に密集する古墳群であり、現在120基程の円墳が宮内庁の宇治陵墓として管理されている。

（文献に登場する二子塚古墳）

二子塚古墳は、平安時代の貴族の日記の中にその名を散見することができる。まずは、藤原忠実が著した『殿暦』の康和５年(1103)７月24日条に「二子墓」と記され、次いで忠実の子藤原頼長が著した『台記』の久安６年(1150)９月26日条には「二子陵」と記されている。この両日記にでてくる「二子墓」なり「二子陵」は、文面よりこの二子塚古墳と同一のものと見てまちがいなく、平安末期においてはこの古墳の存在が当時の貴族の間に知られていた事がわかる。また、江戸時代の宝暦４年(1754)に出版された『山城名跡巡行誌』の第６には「二子塚　在岡屋」とあり、現在我々が使用する二子塚の名称は概ね近世には確立していたと考えられる。このように、本墳は古くより著名な古墳であったことがわかる。

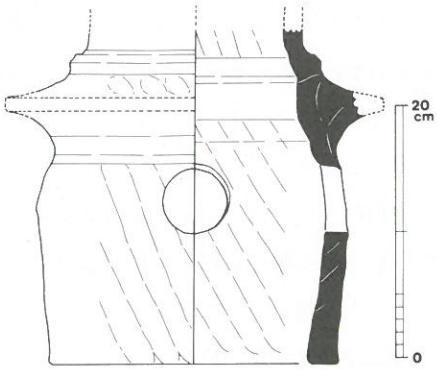
（明治の地籍図）

明治初年頃のものと思われる二子塚周辺の地籍図が現在宇治市に残されている。この地籍には地割りと地目とが記されており、これより当時の二子塚古墳の状況を知ることができる。墳丘部分の地割りは概ね前方後円形となっており、地目は林とある。周濠は前方部前面及び



第３図　五ケ庄二子塚古墳周辺の地籍図（明治初年頃、上が北）

西側に「L」字形に描かれ、それを囲む堤が表現されている。後円部の西・北側にも竹藪として周濠・堤の痕跡を看取できる。また、周濠の西側には田・畑として長細い地割が認められ、これがおそらく外濠の痕跡を示していると思われる。このように、明治初年頃の二子塚古墳は墳丘がほぼ完存しており、周濠・堤・外濠の一部及び痕跡をかなり良好に残していたことが理解できる。なお、遺存する周濠・堤は現在の状況とほぼ等しいと思われ、周濠の大半の埋没は江戸時代以前であったことがわかる。



第4図　大正年間出土の埴輪

（京都大学蔵）

（大正年間の後円部破壊）

このように、比較的良好に遺存してきた二子塚古墳は、大正3・4年に後円部が土取りにより破壊され、大きくその形状をそこなうこととなった。この破壊の報に接し大正4年5月に現地におもむいた梅原末治はその状況を次のように報告している。「(後円部は)既ニ土砂採掘ノ為ニ其ノ大半ヲ失ヒ、(中略)凹所ノ下方ニ當リテ稍深位ニ大石三四ノ埋没シテ墳ノ主体ノ一部タルヲ思ハシメタリ。而シテ此ノ封土ノ破壊部ニハ埴輪圓筒ノ破片散在シ、マタ礫石ノ遺存スルモノ多カリシ」。梅原が現地を調査した時点では、すでに後円部の大半は破壊され、主体部のものと思われる大石が数個残っているにすぎなかったらしい。しかし、現在では、梅原が主体部の一部と考えた大石もすでになく、彼の調査後、なお少しの土取りが行なわれた事が考えられる。

梅原は、このため後円部破壊時の状況を当時の西方寺住職より聞き取りしている。それによれば、「後圓中央ノ土砂ノ採掘に當リ、基底部近ク小石ヲ積ミ重ネタル室アリ、上部ヲ覆フニ大石ヲ以テシ、マタ周圍ニモ大石ヲ置ケル構造」であったらしく、彼は本墳の主体部が横穴式石室らしいと考えた。ただ、この石室は「發見ノ當初既ニ原形ヲ損セルノ形迹」があったらしく、完存ではなかった可能性を指摘している。このように、本墳の主体部が横穴式石室であったらしいことは、今回の我々の聞き取り調査からも充分可能性の高いこととすることができる。子供時代に二子塚古墳の後円部土取りを実見した飯田武男氏(明治36年生)によれば、後円部を削った時に巨石を組みあげた構造物が発見されたということであり、東西方向に主軸をもつ横穴式石室がこの時露出した可能性は極めて高い。また、土取り以前では、ここにこのような石室があるのを全く知らなかったという事から推測すれば、石室は開口せず完全に封土中に埋もれていたと考えられる。また、竹中宏氏(昭和9年生)によれば、この

土取りによって出土した巨石を西方寺本堂裏に運んだのを母の(故)竹中みつゑ(明治28年生)が実見したといい、現在、西方寺本堂裏の庭にある巨石(3.3×2.5m)がその石であるという。この石が石室のどの部分に使用された石材かはすでに確証を欠くが、形状から考えて天井石もしくは奥壁に使用されたものではないかと思われる。他の石がその後どのようになったかは不明である。

遺物については、石室内より全く出土しなかったといい、わずかにこの時採集された埴輪片(第4図)が現在京都大学に残されている。この埴輪は、形象埴輪の基部にあたり、その形状より人物埴輪の一部と考えられる。

(伝二子塚古墳出土鏡)

二子塚古墳より出土したと伝えられる鏡の写真が、昭和62年に京都府内を巡回展示した「鏡と古墳」展示図録[註7]にのっている。この写真は、樋口隆康氏が多年にわたって収集した写真資料の一つで、現物は不明であるという。図録によれば、直径12cmの四乳四獣形鏡とあり、鏡周囲の錆化が著しい。仿製鏡である。

(宇治市史編纂に伴う墳丘測量)

昭和46年になって、宇治市史編纂に伴って二子塚古墳の測量調査が実施され、その成果が『宇治市史　第1巻』に報告されている。この測量が本墳にとっては初めてのものであり、本報告においてもその測量図を使用している。

市史ではこの測量成果を次のように報告している。「墳丘の全長は105mにおよび、前方部の幅は80mでかなり広がり、高さも11.5mと比較的高いことが判明した。後円部を図上で復元すると直径60m、残丘の高さは9.5mである。墳丘裾には段築が認められるが、墳丘のまわりには、

第5図　五ケ庄二子塚古墳昭和46年測量図

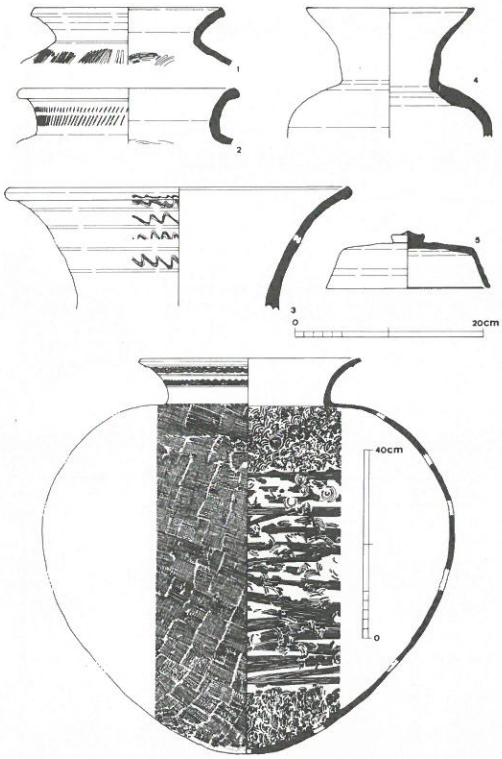
現在の南西角を中心に幅23m の濠が鍵形に残っている。この濠の幅の周湟は前方後円の墳丘をひとまわりしていたと推察される。また周湟の外側には幅14m の堤防がめぐらされている」。この測量による墳丘等の各数値については、今後、二子塚古墳の調査が進展する中で変更されていき、より正確なものへと向わねばならないが、とにもかくにも、測量調査によって本墳が100m を超す規模の大型前方後円墳である事を証明できたことは大きな成果であった。

（外濠の発見）

昭和60年の夏、外濠の発見により、本墳が２重周濠を備える古墳であることがわかった事は、前述した。この調査成果については、すでに本市教育委員会が「二子塚古墳外濠発掘調査概要[註8]」として報告しているので詳細はこの報告にゆずり、ここではその成果を略記したい。

外濠を発掘調査で確認した地点は、現在残る堤の角の南側である。外濠は素掘りの幅約12m、深さ約1.5m の規模を測る。濠底には粘土層が認められ、一定時間、この外濠が滞水していた事が窺えた。濠内からは、須恵器・土師器・埴輪が出土し、これらの遺物より外濠が埋没したのは奈良から平安時代にかけての頃であることが推察された。

外濠の調査については、調査範囲が狭く、この濠がどの程度の広がりをもって古墳を取り巻くのかは、今後の調査をまたなければならないが、現在の地形からでも一定の推測は可能である。まず、前方部前面であるが、これは外濠の発見地点が前方部前面側であるため、この部分には存在していると見てよい。地形より外濠の存在が予測できるのは、古墳の西側である。この部分は、明治の地籍図において堤にそって長細い地割が認められ、現在においてもその地割は道路・宅地として存在している。外濠部分にあたるところは、現在家屋が建っているが、その前は水田であったといい、この水田は周囲より一段低かったという。この水田の東西長は約10m であったという。現状の中では、この地割りを外濠の名残りと見るのが最も可能性が高い。古墳の東側は西に比べ７m 程も高く、この部分に外濠が存在するか否かは今後の解決すべき点の一つである。



第６図　外濠出土の須恵器

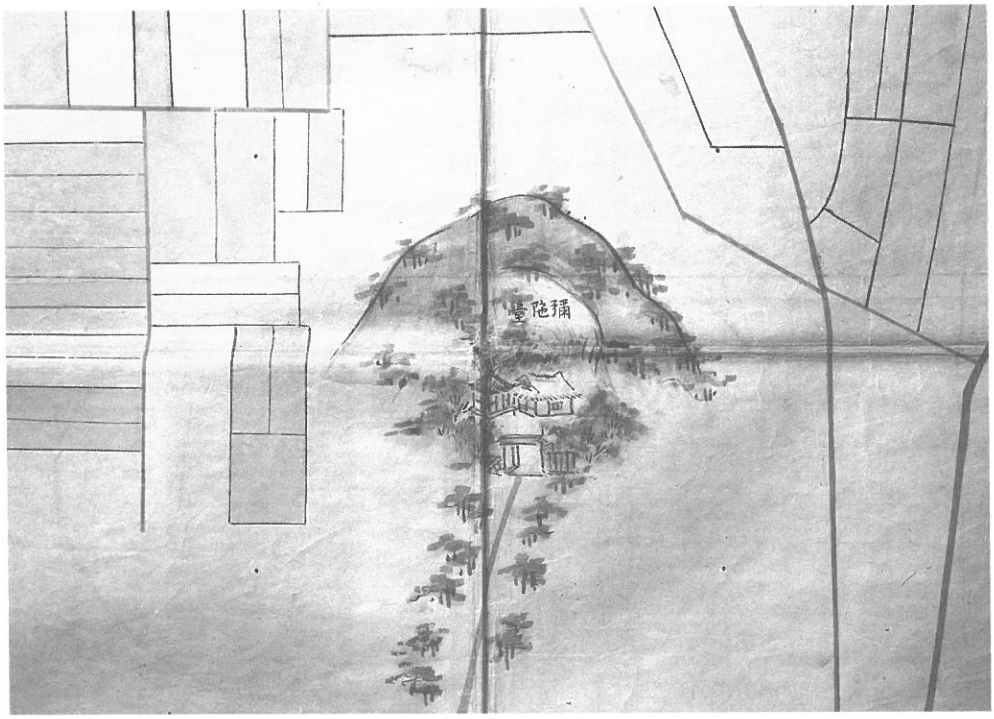
（西方寺）

西方寺は、現在、浄土宗に属するが、かつては天台宗の寺であったという。開基創立については確認されていない。当寺は、「弥陀次郎」とも呼ばれる。これは、『山城名勝志』や『都名所図会』などが記すように、当寺本尊の阿弥陀如来にかかる縁起である「弥陀次郎伝説」から、このように俗称されるようになったものである。万福寺が所蔵する「万福寺山内古図」においては、当寺は「弥陀堂」と記されている。

この阿弥陀如来を本尊として信仰を集めた西方寺は、近衛家から毎年回向料の寄進を受け、そのつながりは、終戦まで続いていた。本堂の裏には、関白近衛兼経墓と伝える墓石が建っている。

前述の「万福寺山内図」が記す西方寺裏には、小山が描かれている。おそらく、二子塚古墳の墳丘を描写したものである。地元では、古墳を「ダンノヤマ」、濠を「ダンノイケ」と通称しているという。

古墳の東側周濠が、いつ頃埋めたてられたかは、西方寺の創立と深くかかわっていると思われるが、現時点ではその時期を明確にできない。但し、諸文献や古図などより、江戸時代の前半には現在の位置に西方寺が営なまれていることはたしかであり、さらにどこまで遡り得るかについては、各方面からの検討が必要である。



第７図　「万福寺山内古図」に描かれた西方寺と二子塚古墳

3. 調査の経過

（昭和62年度の調査）

二子塚古墳の墳丘調査としては最初のものである昨年度の発掘調査は、大正年間に破壊された後円部の残存状況の確認を目的としたものであって、その成果はすでに報告したように、後円部東側の墳丘斜面と、後円部中央部に礫群を発見するものであった。前者は、おそらく後円部の第２段目の墳丘斜面に相当するものと思われ、葺石の遺存が部分的に確認された。後者は、墳丘のほぼ中軸にそって南北に設定したトレンチで、その一部を確認したものではあったが、状況的にはかつて存在した石室に関係する施設の可能性を窺わせるものであった。昨年度の報告では、この施設に基礎礫群という名称を与え、石室の基礎地業の可能性を指摘したが、その範囲、具体的な構造については次回の調査に期すこととなったのである。

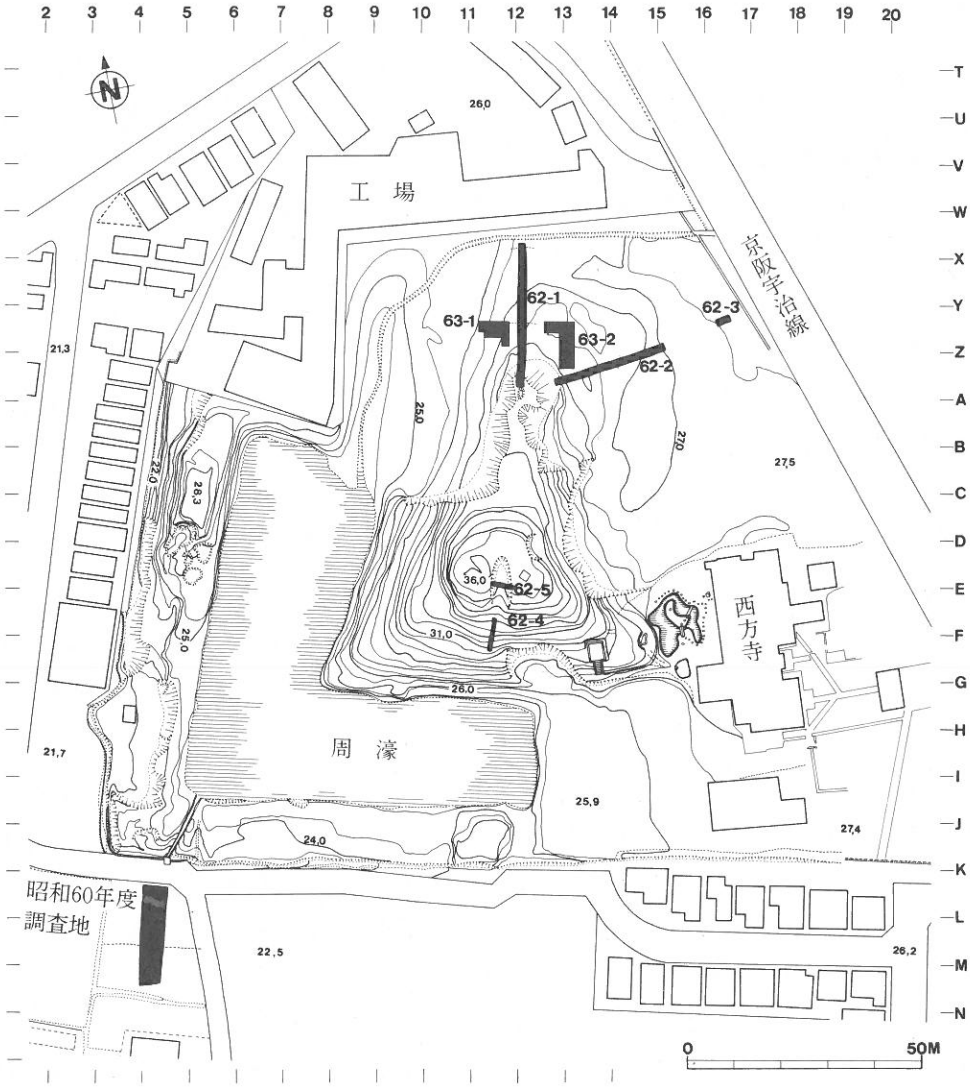
（本年度の調査経過）

本年度の調査は、昨年、図らずも検出することができた後円部中央部の施設が、はたして石室の基礎であるか否か、また、その規模等についてはどうなのかについて、具体的資料を得ることを主目的として、発掘調査を実施することとなった。

調査は、まず、昨年礫群を発見したトレンチ(62―１トレンチ)の西側と東側とに試掘トレンチを設定し、礫群の掘方北辺をそれぞれ東方・西方へと追求することから始めた。西側に設定したトレンチを63―１トレンチ、東側のものを63―２トレンチとする。また、62―１トレンチについては、礫群部分を再び掘りなおした。トレンチの呼称は、頭に調査年度を用い、後にトレンチ番号を表わすこととしたい。

63―１トレンチは、当初、南北２m、東西７mに設定をし、表土を除去したところ、盛土を掘り込んだ基礎礫群掘方の北辺と北西角部を発見できたので、南に拡張を行い、礫群の遺存状況の確認に努めた。礫群は、62―１トレンチに近い、東半部で比較的良好に遺存していたものの、西半部では、後世の礫の抜き取りにより遺存状況が悪く、掘方を検出するに留まった。

63―２トレンチも、当初は63―１トレンチと同様、基礎礫群の掘方を求め東西トレンチを設定し表土を除去した。トレンチ東端部で掘方北東部を発見したため、この部分でトレンチを南に８m程拡張を行い、掘方東南隅部の検出に努めた。本トレンチによる基礎礫群の遺存状況は、62―１トレンチと比べると悪く、大正年間の後円部破壊時に礫そのものもかなりの量が抜き取られたと考えられる。また、トレンチ中央部付近に後円部削平後に築かれた野井戸を検出した。野井戸については、調査に伴う掘削を行わないとしたため、最終的には土



第８図　昭和62・63年度トレンチ配置図(昭和46年測量図を調整)

柱状に残ることとなった。調査の終盤で、掘方北東部の礫群を底面まで掘り抜く作業を行い、底面の構造を窺うこととした。

調査が概ね終了に近づいた、平成元年１月28日㈯に市民対象の現地説明会を実施した。寒風ふく寒い日ではあったが、100名を超える市民参加をえた。

その後、実測作業や補足作業を行い、調査地を埋め戻すこととした。埋め戻しにあたっては、礫群には土のうで直接土が当たらないように保護を行い、調査で掘削した土で埋め戻しを行い現地調査を終了した。

4. 遺　　構

前述のとおり、今年度の調査は、62—1トレンチで検出した基礎礫群の範囲及び構造を究明する目的から、62—1トレンチの西側に63—1トレンチを、東側に63—2トレンチを設定した。以下、順次調査の概要を報告するが、今回の調査は基本的には基礎礫群の継続した調査であることから、62—1トレンチの調査成果についても再度報告することとする。ただし、前回の調査では部分的な観察であるため、遺構の詳細は不明瞭な点も多く、誤認もあった。ここでは、今年度調査によって知り得た事実から明らかに昨年度の報告の中で、事実誤認と認められる個所については修正して、調査の状況と成果についてその概要を述べることとする。また、部分的ではあるが、墳丘盛土及び地山層の観察も行った。あわせて報告する。

（昨年度の状況）

トレンチ配置と検出遺構　二子塚古墳については、これまで墳丘部の発掘調査は実施されたことなくその正確な範囲・規模は不明であった。このことから、昨年度は大正年間に破壊された後円部を中心に、後円部の直径を確認することを目的として62—1・62—2・62—3トレンチを設定し発掘調査を実施した。

62—1トレンチでは、表土下で直ちに墳丘盛土を検出するとともに後円部中央付近で、基礎礫群と仮称した掘込み地業を検出した。62—2トレンチでは、西半部分で後円部の墳丘盛土を東半分で周濠部分を検出した。さらに、墳丘盛土斜面を現地表下3m程まで追究した結果、原位置を保つ葺石の一部を検出した。また、周濠は河川堆積の砂によって埋没していることが判明した。62—3トレンチは、東側堤の検出を目的として現地表下2m程まで掘削したが、依然河川堆積による砂が厚く堆積しており作業の安全を考えこれ以上の掘削は行わなかった。62—4・62—5トレンチは、前方部の調査に備えた予備トレンチである。

以上、62年度各トレンチの調査内容を簡単に述べた。以下では、62—1トレンチで検出した基礎礫群の調査成果についてその概要を述べることとする。

掘　方　62—1トレンチ南側、後円部残丘北端部で腐植土直下に暗茶褐色系の墳丘盛土とともに基礎礫群とその土壙掘方を検出した。検出長は、土壙掘方部分で東西長1.5m、南北長8.5mであった。基礎礫群の範囲については調査範囲の中では確認できなかったが、東西方向はボーリング探査によって、また南北方向は墳丘側に依然礫群が潜り込む状況等から、全体としてはさらに広がることが理解された。土壙掘方は検出状況や土層断面の観察から、墳丘築成のある段階において一度盛られた墳丘盛土を再び穿って構築されている。墳丘盛土は基礎礫群を除くトレンチ全面で検出した。地区ごとに若干の土色の違いはあるものの基本

的には、茶褐色系の異なる土を交互に盛ることによって墳丘は築成されている。後円部がすでに削平されているため、調査範囲の中では土壙掘方が本来どの高さより構築されていたのかは確認しえなかった。土壙掘方検出面で標高27.5m 程、後円部残丘に遺存する礫群では標高28.5m 程を測る。また、土壙底面は未完掘のため確認していない。土壙掘方内で最も低い個所は、礫群北辺部である。標高26.5m 程を測る。後述するが、今年度調査した63―2トレンチの基礎礫群北東隅での断割調査の結果、本標高前後で土壙掘方の斜面がロート状に角度を変えほぼ垂直に掘られていることを確認した。

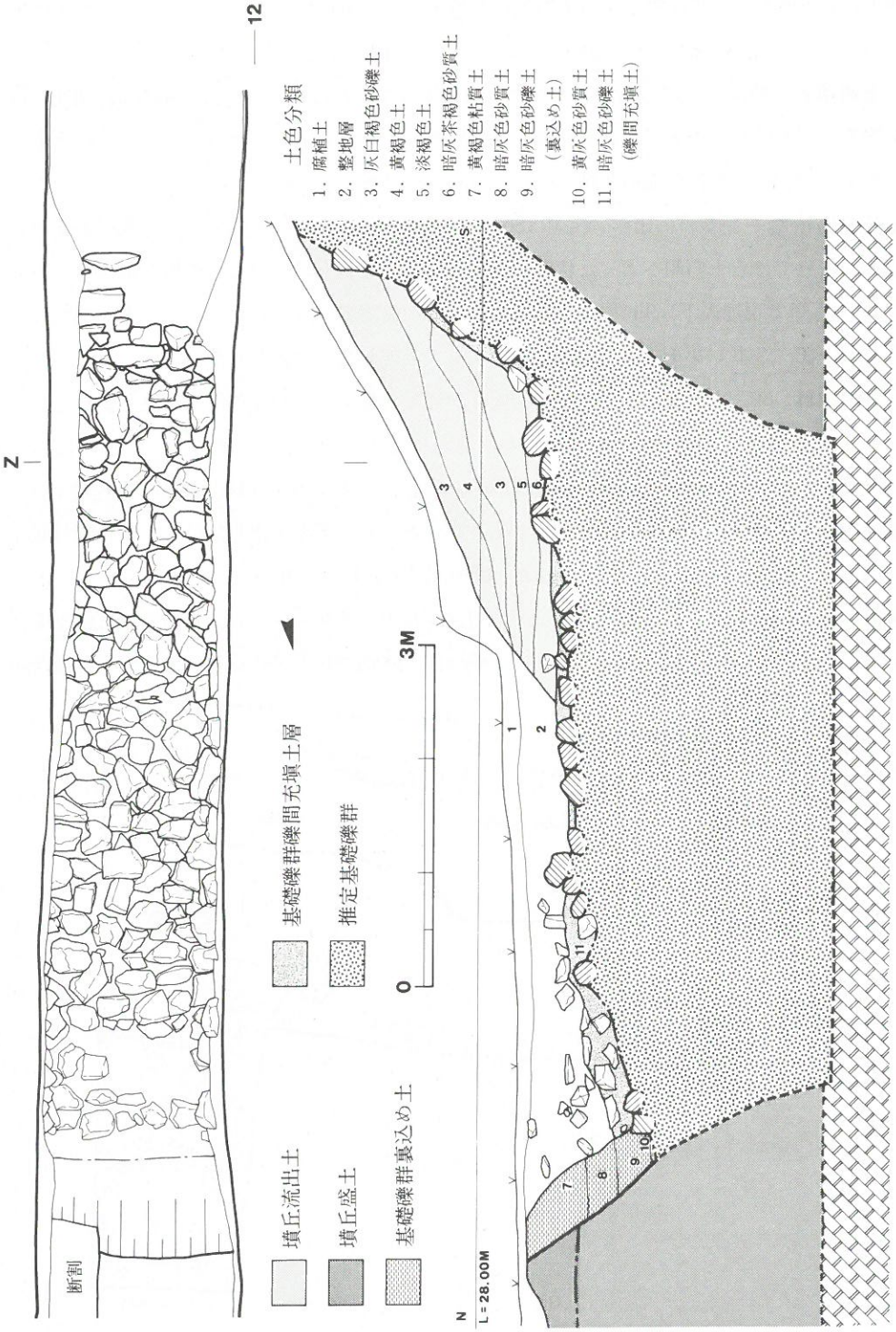
基礎礫群　基礎礫群に使用する石材は大半がチャート質の河原石であり、その他若干の砂岩が含まれる。石材の大きさは径20～30cm 程のものがその主体をなす。これらの礫群は、構造的には単に土壙掘方内に投入したのではなく、幾段かに水平に積み重ねられた状況を呈していた。礫群の遺存状況から復元すると、トレンチ内では現状で３・４段、トレンチ南端の後円部残丘の崖面には４・５段程の礫が遺存することから、少なくとも基礎礫群の深さは現状では2.1m 以上、礫の積み上げは８段以上に復元することができた。また、礫群は土壙掘方に密接して構築されるのではなく、黄褐色粘質土・暗灰色砂礫土等を裏込め土としてその空間に充塡していた。後世の礫群の抜き取りのため、構築当初での裏込め土の範囲は不明であるが、土壙掘方検出面で50cm 程遺存することが認められた。この裏込め土についても、今年度調査の結果、土壙掘方底面まで達しないことや、礫群の安定を図るため礫間に使用された礫間充塡土と基本的には同一土層であること等が理解された。

以上、62―１トレンチの調査成果を述べた。このように、本トレンチは、後円部の墳丘遺存状況と後円部径追究のためのトレンチであったことから、結果的には横断するような状況で基礎礫群とその掘方を検出する格好となった。そのため、その一部のみを確認したに留まったが、前述のとおりの調査成果を得ることができた。さらに、その範囲については遺構の主軸方向は不明であるものの、ボーリング探査等によりその平面形は方形ないし長方形の大型施設であること、その性格については、掘込み地業に類似したもので、主体部の横穴式石室の基礎部にあたる施設であろうことが理解できた。

それでは以下に、今年度調査した63―１・63―２トレンチの調査の成果について順次報告する。

（63―１トレンチ）

63―１トレンチは、基礎礫群土壙掘方北西隅を検出するため62―１トレンチ西側に設定したトレンチである。昨年度のボーリング探査により、概ね礫群の位置が推察できたため、位置的には62―１トレンチのすぐ西側、墳丘のほぼ中軸線上に設定することとなった。本トレンチも62―１トレンチと同様、層厚10cm 程の腐植土と同じく層厚10cm 程の現代整地層を

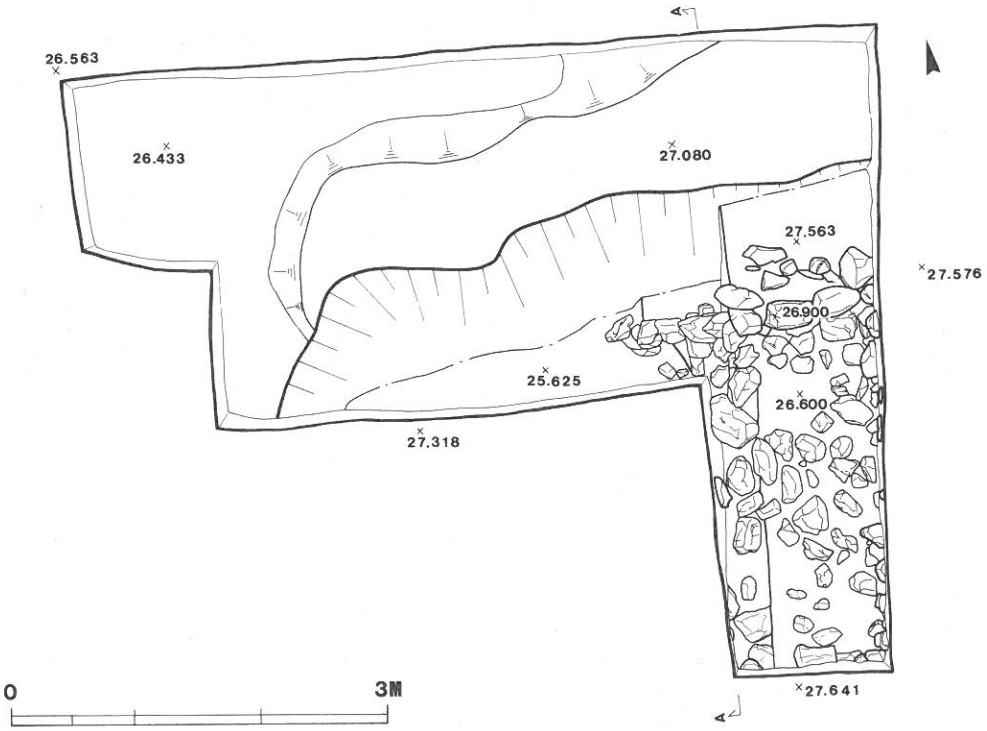


第10図　62－1 トレンチ実測図

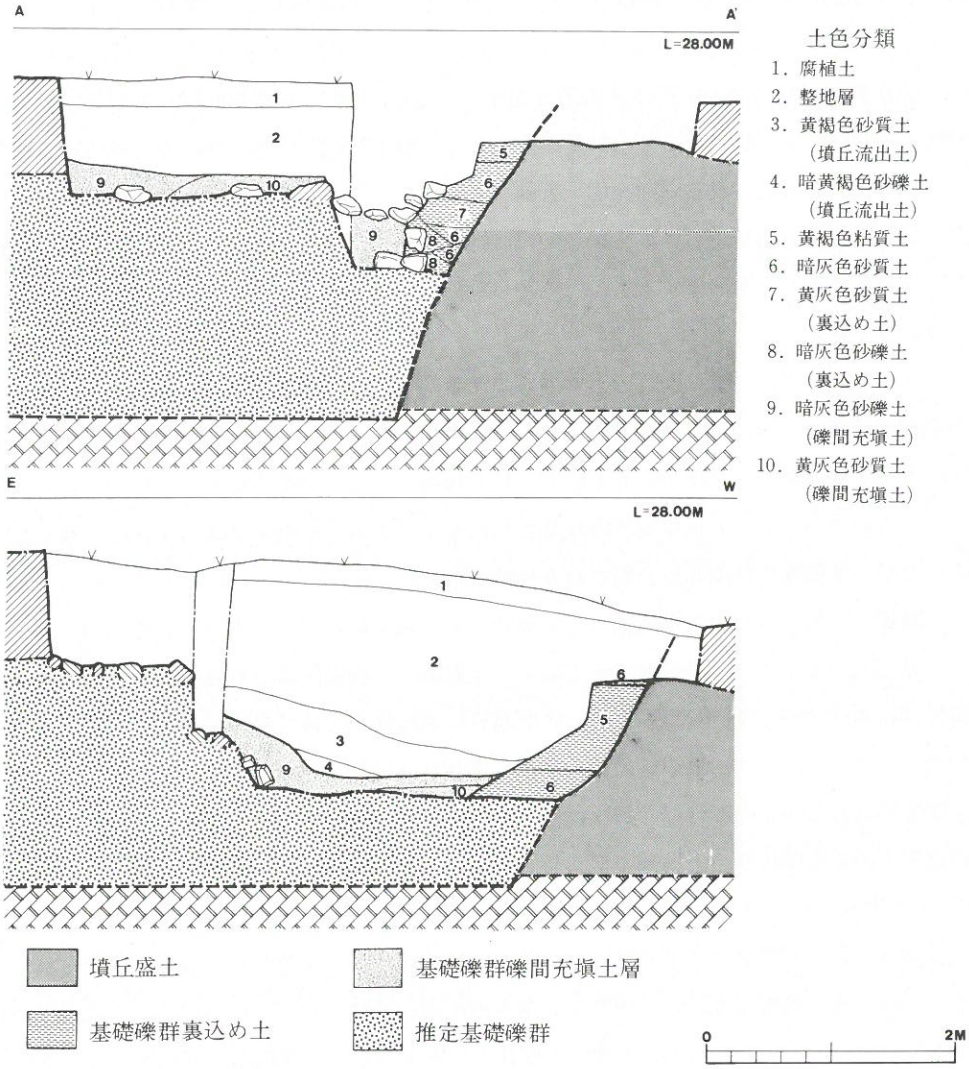
除去すると直ちに基礎礫群とその土壙掘方を検出した。墳丘盛土の詳細については後述するため、ここでは基礎礫群及び土壙掘方についてその概要を述べる。

土壙掘方　検出したのは土壙掘方の北西隅と北辺部である。検出長は東西５m、南北４mを測る。掘方は62―１トレンチと同様、一度盛られた墳丘盛土を再び斜めに穿って構築する。大正年間の土取りが後円部の西側を中心に行われた結果、土壙掘方の検出面はトレンチ東側で標高27m程を測るのに比べ、西側は80cm程低くなっている。それに伴い土壙掘方北辺も、北西隅寄りでは若干内側へ入った状態で検出した。土壙掘方の底面は、礫群の遺存しないトレンチ西側で現地表下1.9m程まで掘削を行ったが確認できなかった。それ以上の掘削については、63―２トレンチで断割調査を実施することとしたため行わなかった。

基礎礫群　62―１トレンチでの検出状況と同様で、腐植土・現代整地層を除去すると、トレンチ東側で夥しい数の礫群を検出した。さらに遊離する礫を除去すると、現地表下80cm程の黄灰色砂質土で原位置を保つ基礎礫群を検出した。標高26.8m程を測る。状況的には、礫は密集していない。この状況は、62―１トレンチでも一部を確認している。基礎礫群北端部の礫が認められなかった黄灰色砂質土露出部分で、標高は26.8m程である。しかし、全体的には63―１トレンチの礫群遺存状況と相違をなすことから、トレンチ西壁側に断割を行い下層の確認を行った。その結果、黄灰色砂質土は層厚20～30cm程で、その直下には暗灰



第11図　63―１トレンチ実測図



第12図　63－1断面実測図

色砂礫土と礫群が良好に遺存することが確認できた。このことから、検出された黄灰色砂質土は礫群を安定させる礫間充塡土であり、その土色の差いは、基礎礫群の構築時における作業工程差を示す可能性があることが理解された。

トレンチ西側は前述のとおり、現地表下1.7m程まで墳丘盛土・墳丘流出土等の混った現代整地層であり、その直下は礫間充塡土の暗灰色砂礫土及び黄褐色砂質土である。土壙掘方の遺存状況から、この部分は後円部の破壊時以降礫群のみが抜き取られたことがわかる。

裏込めの状況　裏込め土は一部を残しトレンチ西側の部分は礫群が遺存しないことから、すべて除去した。裏込めの状況はこの残したトレンチ東側の裏込め土断面で観察することと

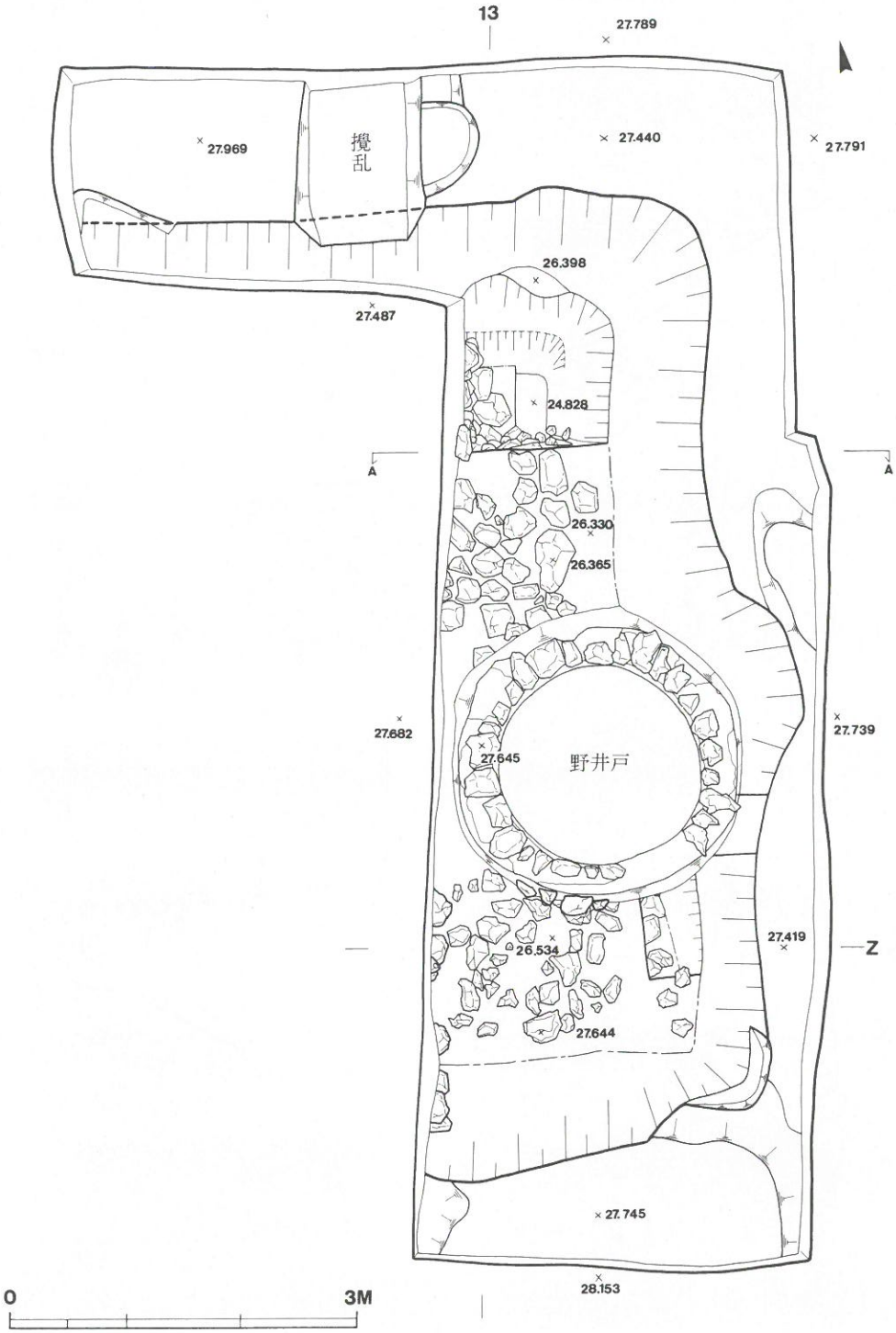
した。層厚的には約１ｍ分を観察することができた。層序的には、土壙掘方検出面は62―１トレンチと同様に黄褐色粘質土である。層厚20cm 程を測る。その下層は層厚30cm 程の暗灰色砂礫土、層厚25cm 程の黄褐色砂質土、そして層厚20cm 程の暗灰色砂質土、暗灰色砂礫土が交互に盛られていることが看取できた。上層の黄褐色粘質土を除くこれらの土層は、基本的には礫群に見られる礫間充塡土と同一層であり、その層序もほぼ一致する。これらの状況は、先の礫群構築時の作業工程差の可能性を補強するとともに、裏込め作業も同一工程の中で行われたことを示唆するものと考えられる。

（63―２トレンチ）

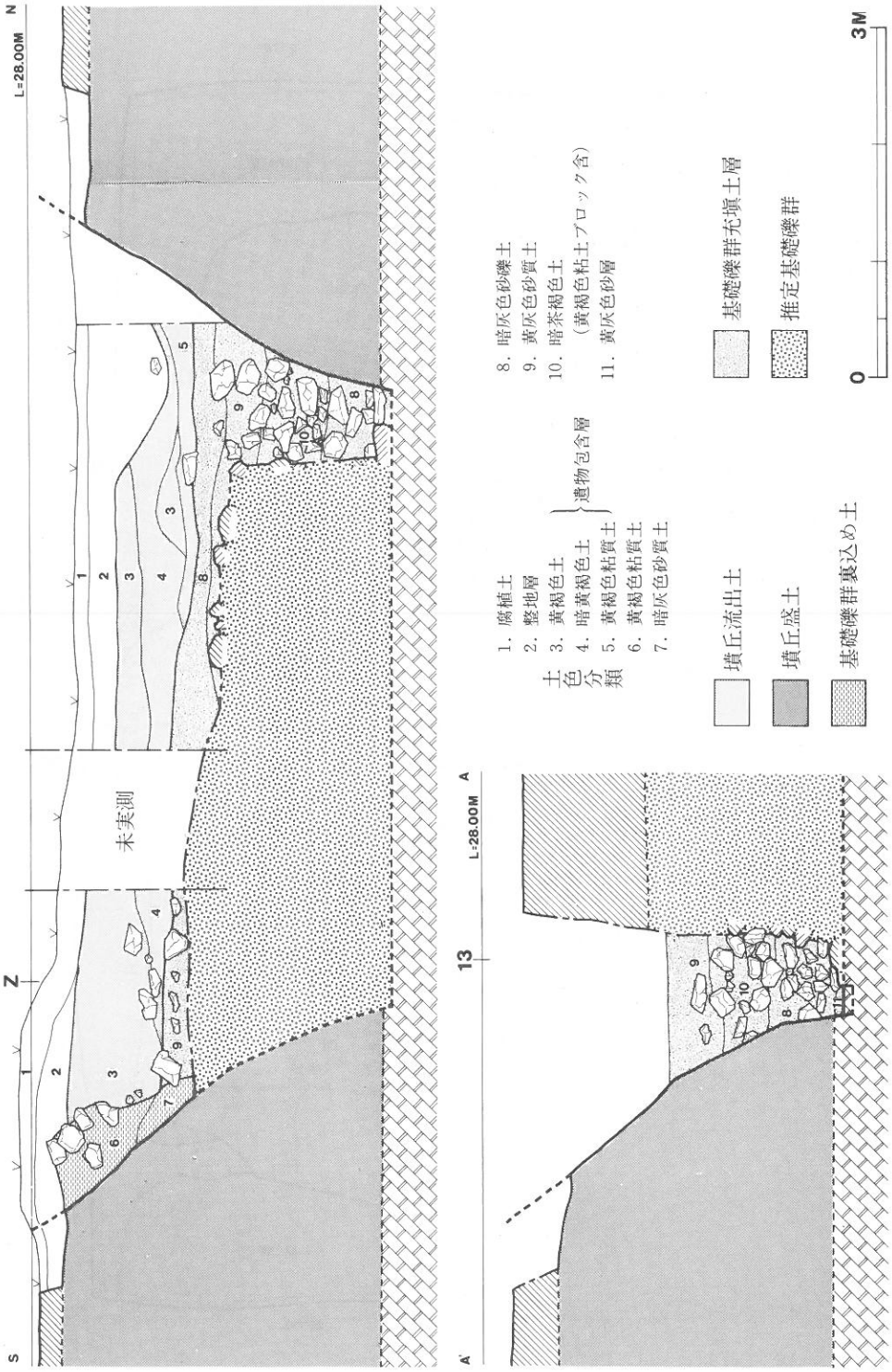
63―２トレンチは、基礎礫群の土壙掘方の北東隅と南東隅を確認するため62―１トレンチの東側に設定したトレンチである。本トレンチも63―２トレンチと同様に、層厚20cm 程の腐植土及び現代整地層を除去すると直ちに基礎礫群とその土壙掘方を検出した。なお、トレンチ中央の野井戸は、大正年間以降構築されたものである。掘削をせず、土柱状に残した。そのため、基礎礫群は南北に分断される状態となった。

土壙掘方　検出したのは土壙掘方の北東隅・南東隅と東辺部及び南辺・北辺部の一部である。検出長は東西６ｍ、南北8.5m である。土壙掘方の検出面は最も残りの良い南側で、標高27.8m 程を測る。掘方は他のトレンチ同様に墳丘盛土を再び穿って構築する。平面形は基本的には方形を呈す。東辺ほぼ中央部で、東側へ突出した部分が認められた。丁度、野井戸部分にあたるがこの部分にも黄灰色砂質土の裏込め土が良好に遺存していたことや、野井戸掘方との重複関係から土壙掘方構築時からの突出部であると判断できた。東辺部よりほぼ30cm 程突出する。また、土壙掘方の底面は北東隅を断割って確認した。前述したとおり、土壙掘方の斜面の角度は一定ではなく２個所の屈接点をもちそののちほぼ垂直に掘られている。そのため土壙掘方底面の平面形は、掘方検出面のそれより一回り小さくなる。掘方の底面は地山まで達しさらに10cm 程地山を掘り下げ底とする。掘方底面は標高24.9m 程を測る。地山は暗灰褐色土である。

基礎礫群　63―２トレンチと同様に遊離する礫を除去したところ現地表下1.2m 程の黄灰色砂質土の礫間充塡土上で原位置を保つ基礎礫群を検出した。野井戸北側の礫群に比べ南側が密集しているように見えるのは、少し黄灰色砂質土を掘り下げてしまったためであり、基本的には同一状況を呈す。礫群の構築状況は北東隅の断割によって約1.5m 分観察することができた。構築時の作業工程差は、礫間充塡土の違いから３工程程度確認することができた。上層から、黄灰色砂質土、黄褐色粘土ブロックを含む暗茶褐色土、暗灰色砂礫土である。底部は掘り凹めた地山に直接礫を積み上げるのではなく、層厚10cm 程の黄灰色砂層を敷き、それに半分程埋めた径30～40cm 程の平たい礫をすえたのち礫群を構築する。



第13図　63―2トレンチ実測図



第14図　63－2トレンチ断面実測図

裏込め状況　本トレンチでも土壙掘方検出面で裏込め土を確認している。土壙内の礫群が後世に抜き取られているため、礫群との境は不明であるが、土壙掘方に沿って比較的良好に遺存していた。裏込め土の層序も他のトレンチのそれとほぼ同一状況である。ただ、裏込め土は土壙掘方底面より行われるのではなく、垂直に積み上げられた礫群と土壙掘方斜面との間に空間が生じる標高26.3m 程から充塡されたことが確認できた。つまり、裏込め土は断面三角形の空間に行われていることとなる。トレンチ南側の黄褐色粘質土の裏込め土に遺存する礫は原位置を保つものである。これは62―１・63―２トレンチの同一土層でも認められた。裏込めの際、黄褐色粘土の場合のみ一緒に礫が充塡されるようである。

以上、土壙掘方・基礎礫群・裏込め状況と各項目にわけ各トレンチの調査成果を述べた。基礎礫群全体の総合的な概要については、再度整理して後述することとする。

（墳丘盛土及び地山の観察）

今年度は各トレンチの調査によって、基礎礫群以外に墳丘盛土及び地山(旧地形)について部分的観察が行えた。以下にその概要を述べることとする。

墳丘盛土　各トレンチで検出した墳丘盛土は、層厚の差はあるものの基本的には、腐植土及び現代整地層を除去すると直ちに検出することができた。最も遺存状況の良いのは、63―２トレンチ南端部で標高27.8m、反対に低いのは63―２トレンチ西端部で標高26.2m を測る。昨年度の報告で62―１・62―２トレンチでは、墳丘盛土は地区ごとに若干の土色の差異はあるものの基本的には異なる土を交互に土盛りすることによって築成されていることを述べた。また、それはさらに数m 単位の大きなブロックに分けることができ、これについては盛土工事における作業の工程差を示す可能性を指摘した。今回はこれらに加え、さらに大きな作業の工程差を示す墳丘盛土の土色の差いを認めることができた。

63―２トレンチで検出した墳丘盛土は、基本的には62―１トレンチで検出したものと同一の暗茶褐色系粘質土であるのに対し、63―１トレンチでは東側一部を除くすべてが黒褐色系粘質土によって築成されていた。当初これは盛土工事での平面的な分割線と予想したが、63―２トレンチの土壙掘方北辺下部でも認められたことから、墳丘全体での作業工程の差いではなく基本的には両層は同一的に墳丘盛土として使用されているようである。調査の範囲では、この両層がどの範囲まで築成されていたかは確認できなかった。墳丘自体が何段築成であるかは、詳細な墳丘の調査を待たねばならないが、後述するように少なくとも段築１段目は地山(旧地形)であり、第２段目以上は盛土によって築成されていると推察される。

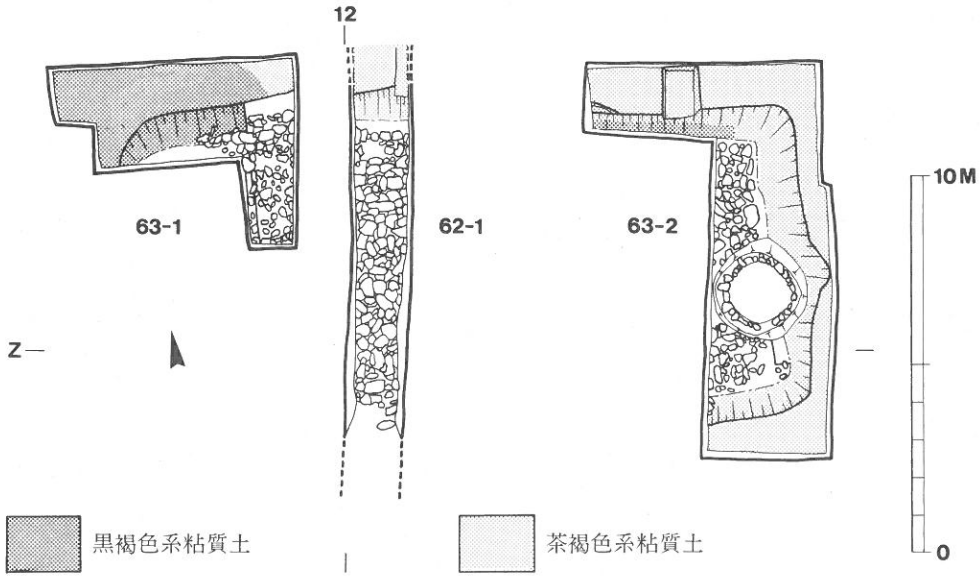
また、段築第２段目以上については、後円部及び前方部の墳丘残丘崖面の土層観察をする限り、墳丘の上部は、黄褐色系の粘質土・砂質土・砂礫土を使用して築成しており、明らかに各トレンチで検出した墳丘盛土と土色的にも築成状況的にも異質であることが理解された。

前述のとおり、墳丘自体が何段築成であるかについては、決定的な根拠を持たないため、これら黄褐色系の盛土が直ちに、段築の第３段目に対応するとは速断はできないが、このような土層観察からもその可能性は高いといえよう。

地　山　地山(旧地形)については62－２トレンチでも一部確認している。墳丘盛土斜面を追究し葺石を検出した際に標高25.2m 程でほぼ水平堆積をなす黄褐色系砂礫層を認めた。断割を行ったところ、本層は上層に斜めに被覆する暗茶褐色系盛土にかわり、依然下方へ延びる様相を示し、さらに、標高24.5m 程では本層上面に葺石が認められた。

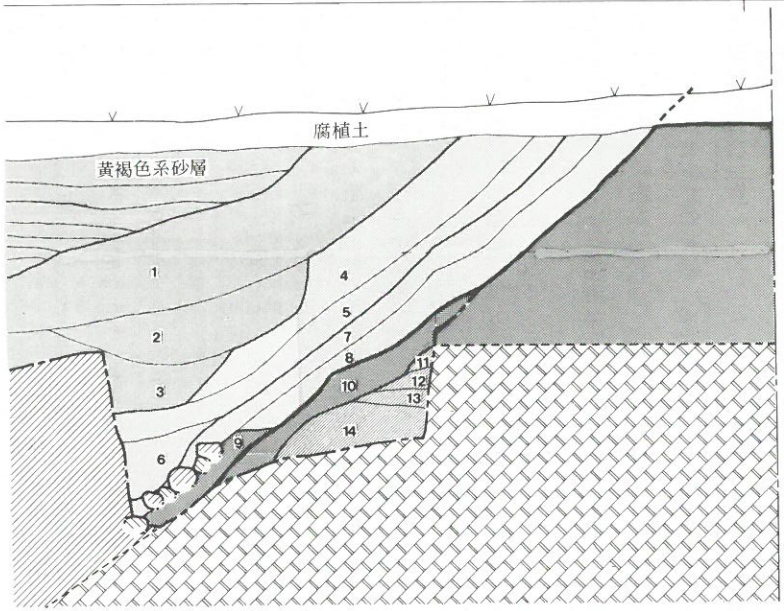
今回の調査で地山を確認したのは、６３－２トレンチ基礎礫群北東隅の断割部分である。前述のとおり、基礎礫群の土壙掘方は、基本的には墳丘盛土を穿って構築するが、底面は地山層の暗灰褐色土を穿って基礎礫群の安定を図っている。この暗灰褐色土は現地表下2.7m 程、標高25m 程を測る。

ごく限られた部分的な観察であるため、墳丘全体での地山と墳丘盛土との関係については不明瞭ではあるが、本古墳の立地条件及び今回の調査成果を合わせ考えれば、後円部付近では少なくとも標高25m 前後までが地山層でありそれ以上が盛土で築成されている可能性が高いといえよう。また、墳丘盛土についても前述のとおり、段築２段目と３段目とは土色のまったく異なる盛土によって築かれており、その境は今のところ不明ではあるものの、62－１トレンチ墳丘残丘崖面で見られた礫上端部の標高28.5m 程であると考えてよいのではないかと思われる。

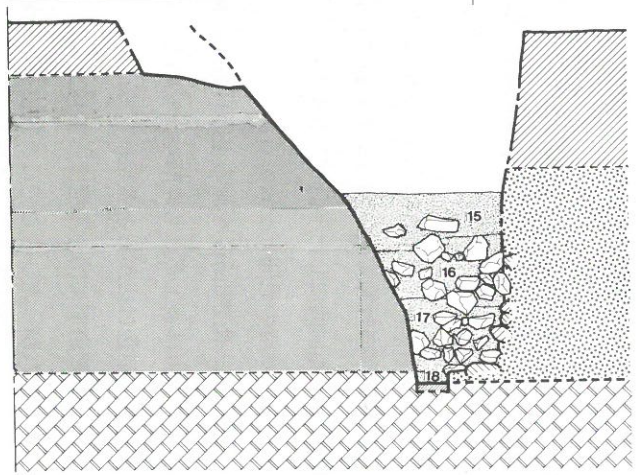


第16図　墳丘盛土土色検出状況

62-6トレンチ東壁　14



63-2トレンチ断割南壁　13　L=28.00M



土色分類

1. 黄褐色砂礫土(遺物包含層)
2. 黄灰褐色砂礫層
3. 茶褐色土(灰色粘土ブロック含)
4. 灰褐色砂礫土(遺物包含層)
5. 茶褐色砂質土
6. 黄灰色粘土(河川堆積層)
7. 橙褐色土
8. 暗茶褐色土(遺物包含層)
9. 暗灰褐色土(葺石裏込め土)
10. 暗茶褐色土
11. 黒色砂礫層
12. 灰白色砂礫層
13. 黄褐色砂礫層
14. 灰白色砂礫層
15. 黄灰色砂質土
16. 暗茶褐色土層(黄褐色粘土ブロック含)
17. 暗灰色砂礫土
18. 黄灰色砂層

0　3M

河川堆積層
墳丘流出土
墳丘盛土
基礎礫群礫間充塡土層
推定基礎礫群
地山層

第17図　地山断面実測図

（小　結）

以上、基礎礫群及び墳丘盛土・地山層の概要について、各トレンチの調査状況からのべてきた。ここでは、これらを整理するとともに総合的に基礎礫群の範囲及びその構築方法について述べることとする。

位置と範囲　基礎礫群の土壙掘方の位置は、後円部のほぼ中央にあたる。詳細な墳丘測量を待たねば墳丘の中軸線は確定できないが、土壙掘方の短軸方向は明らかに中軸線の東側に位置する。これは、主体部の横穴式石室の羨道が東側に開口した平面プランをもっていたことに起因するものと考えられ、大正年間の後円部破壊時の見聞と一致する。

土壙掘方の範囲は、検出面の高さでは東西18.5m、南北8.5mを測る平面長方形の範囲であることが確認できた。しかし前述のとおり土壙掘方は盛土とともに削平を受けているため、構築当初本来の範囲はさらに東西・南北とも2m前後は広がると考えられる。また、63―2トレンチで検出した東辺突出部については、石室羨道部に関わる配慮とも考えられるが、丁度野井戸が位置するため明確なその性格はつかめなかった。ここでは、基礎礫群構築時の作業坑であった可能性もあることも考えておきたい。

土壙掘方　土壙掘方はすでに述べたとおり、一度盛られた墳丘盛土を穿って構築する。本来どの時点で掘削が行われたかは不明であるが、前述したごとく、墳丘段築2段目の盛土が終了した時点、標高29m前後程で行われたと推察される。掘方の斜面は一定ではなく調査範囲の中では、概ね標高26.3m・25.5mの2個所で斜面の屈接点を持ち、それぞれ50°・60°・80°前後の角度を持って掘削されている。そして底面は地山まで達し、さらにそれを10cm程凹めて土壙掘方の底としている。

基礎礫群　地山を穿った掘方底面にまず層厚10cm程の黄灰色砂層を敷き、さらに平坦な礫を裾え床面とする。このあと礫を積み上げていくが、それは一気に行われるのではなく何回かの作業工程に分けて構築される。つまり、礫を3～4段積み上げたのち礫間充塡土層で礫を安定させ、さらに次の工程へと進む。基礎礫群の深さを3.5m程と想定した場合、7回程の小工程が復元できる。礫群に使用する石材は径20～30cm程の大きさで、その大半はチャート質のものである。これらの礫群を土徑掘方底面からほぼ垂直に積み上げている。そのため、礫群は上部ほど土徑掘方範囲より小さいこととなる。

裏込め状況　裏込め土は、掘方と礫群との空間が生じる標高26.3m程より充塡されている。また、この裏込め土の土層は基本的には基礎礫群の礫間充塡土と同一層であり層序も一致することから、先述の基礎礫群の構築の作業工程と同一工程の中で行われたと考えられる。

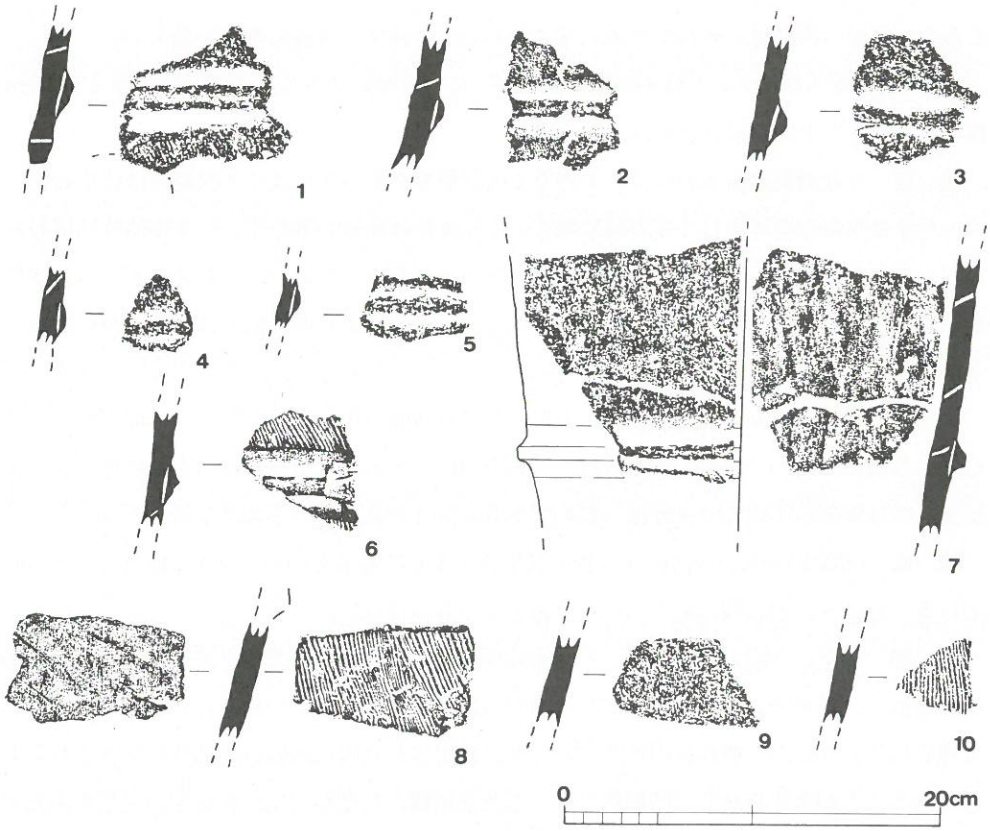
5. 遺　　物

出土した遺物は、今回の調査の性格から基礎礫群の礫群抜き取り後の土壙掘方埋土の現代整地層及び墳丘流出土から出土した埴輪片と、前方部南面の周濠汀線から出土した埴輪片である。種類的にはすべて円筒埴輪であり、小片が多く全形を窺えるものはない。ここでは、遺構出土の埴輪と前方部出土の埴輪に分けて、これらを総括的にその特徴を述べることとする。

（基礎礫群出土の埴輪）

墳丘流出土から出土したもので原位置を保つものではないが、ほぼ後円部の段築に樹立していたものと考えてよい。胴部の小片ばかりで全体を窺える個体はない。

成　形　小片であるため全体的な成形方法については不明であるが、部分的に粘土紐の接合痕を残すものがある。（1）はスカシ孔を持つタガ部分片であるが、幅4cm程の粘土紐の巻き上げが断面及び内面に認められる。



第18図　埴輪実測図

調　整　外面調整は基本的には、すべて１次調整のタテハケだけで２次調整は認められない。ハケは基底部に対して垂直方向で左方向に傾く。部分的な観察のためハケの連続性はわからない。ハケは１cm あたり６条前後の粗いもの（１・10）と９～10条の細いもの（９）とが認められる。内面調整は基本的には、タテハケ後ナデを施す。

タガ・スカシ　タガの断面形態は、上部の凹んだ断面台形のもの（１）が３点ある。タガの上・下は比較的強く丁寧にナデられている。スカシは２個体認められた。（１）のスカシは部分的なため直線的であるが、ほぼ長円のスカシ孔と思われる。（１）以外では、ヘラ状工具による穿孔の際、穿孔の始点と終点が一致せず段差いとなった粗雑な造りのものもある。

焼　成　色調は黄褐色・橙褐色・灰色と多彩であるが、すべて焼け締っている。須恵質のものもあり、黒斑のものは認められない。

（前方部汀線出土の埴輪）

これらは、周濠の渇水期のみ以前より認められていた前方部汀線出土のものである。すべて原位置を保つものとはいえないが、周濠の波によってえぐれた墳丘部から出土したものもあり、概ね段築１段目と２段目のテラス部に樹立していた円筒埴輪である可能性の高いものである。汀線の標高は25m 程である。水に洗われて全体的に表面の摩滅が著しい。

成　形　成形方法については不明瞭ながら（７）により窺い知ることができる。幅２～３cm 程の粘土紐を右上回りに巻きあげている。

調　整　外面調整は基本的には、すべて１次調整のタテハケだけで２次調整は認められない。ハケは垂直方向に対して左方向に傾く。小片または摩滅が著しく、ハケの連続性はわからない。ここでも、１cm あたり９～10条の細いハケを施すもの（２）が存在する。内面調整は、基本的にはタテハケの後、ナデを施すことが（７）等により部分的ではあるが窺い知ることができる。

タガ・スカシ　タガの断面形態は、上部の凹んだ断面台形のもの（３・７）、扁平化した低台形のもの（２・４・５）と、断面三角形のもの（６）とがある。断面台形のものに比べ、三角形のものはナデが不均等でタガは不整形である。スカシ孔を持つものはない。

焼　成　色調は黄褐色・赤褐色・灰色・淡橙色と多彩であるものの、全体に硬質に焼け締っている。やはり、須恵質のものもあり黒斑をもつものはない。

時　期　以上、今回の調査で出土した埴輪の特徴についてその概要を述べた。これらの埴輪の特徴は、基本的には昨年度報告した埴輪の観察結果と変わりない。資料数が少ないために速断はできないが、概ね後円部及び前方部に使用された円筒埴輪は一時的に製作されたものであることが考えられる。時期的には、これら埴輪の特徴から川西氏[註9]編年のＶ期にあたるもので、実年代では６世紀代のものといえる。

（西方寺庭園の石）

現在、二子塚古墳の前方部東側に位置する西方寺本堂の庭園には、多くの石材が庭石として利用されている。これらの石材については以前より、本古墳主体部の横穴式石室の使用石材である可能性が考えられていた。今回は、庭園の石材の略測及び材質等の観察を行った。以下にその概要を述べる。

庭石の使用石材は、種類的には一部砂岩が認められるが、そのほとんどはチャート質のものである。砂岩のものは丸味を帯びた扁平なものが多く、本堂礎石に利用されているものとほぼ同一のものである。さらにチャート質のものを体積別に観察したところ、概ね３種類の大きさに分けることができた。最も大きい石材は、庭園中央に位置する立石で高さ3.2m、幅2.6m、厚さ1.8m、7.5m^3程を計る。他のものから卓越した規模のもので、５m^2程の平担面をもつ三角錐形の石材である。次に一群をなすものは、高さ・幅とも１m前後、厚さ0.5m、0.5m^3程を計るものである。20数石程が庭園に点在する。そして次の一群は、高さ・幅・厚さとも0.5m、0.13m^3程を計るものである。その数は概そ50～60石程である。また、これらの他に、基礎礫群使用の礫程度の河原石は庭園の他西方寺内で比較的多く利用されている。

（小　結）

以上、調査で出土した埴輪片と西方寺庭園使用石材についてその観察の概要を述べた。最後に、これら埴輪・庭園使用石材の観察結果について若干の説明を加えることとする。

埴輪については、今回の調査では資料的には絶対数が少なく、かつ小片で遺存状態も余り良くなかった。このため総合的には昨年度報告を越えるような新しい見解も見い出せなかった。しかし、前方部周濠汀線墳丘側より出土した埴輪は、資料数は少ないものの基本的には後円部と同一時期に製作されたものであろうことを理解した。また、個体数は少ないものの、昨年度報告の中で指摘した、工人集団間の差にまで追究できる可能性がある製作手法の違う一群のものが今回も若干認められた。資料の増加をまたねばならないが、このことは今後の大きな検討課題であるといえよう。

二子塚古墳の主体部については遺存しないため具体的には不明である。しかし、大正年間の後円部破壊時の見聞や遺構・遺物等の調査の成果から、後円部に存在した本古墳の主体部は横穴式石室であったとみてよい。またさらにその横穴式石室の形態は本古墳の築造年代が６世紀前半であることから、時期的に古式の横穴式石室の特徴を持つものと考えられる。とすれば、西方寺庭園に使用されている石材は、本古墳の横穴式石室側石使用石材を転用したものと考えられ、大きさ的には、庭園中央に位置する立石はまさにこの石室の天井石の一部である可能性が高いと判断される。

第19図　西方寺に残る石室使用石材

6. ま と め

二子塚古墳の昭和63年度発掘調査で知り得た成果については、すでに前述したとおりである。ここでは、これらの成果について整理をし本報告のまとめとしたい。

（基礎礫群の復元）

今回の発掘調査における最大の成果は、昨年度の調査でその存在を確認した基礎礫群の規模及び構造を一定把握できたことである。

昨年の調査では、後円部中央部分に掘方を持ち、その中に大型の礫を積みあげた施設の発見という段階に留まっており、状況的にかつて存在した横穴式石室の下部にあたるため、基礎礫群という仮称を与え、石室構築に伴う掘込み地業の可能性を指摘した。しかし、今回の調査結果からは、この施設が石室の基礎部分であることに疑いはなく、後期の大型前方後円墳の横穴式石室の下部構造を窺うことのできる貴重な事例となった。ここでは、その構造について、整理を行うこととしたい。

まず、その構築が墳丘築造のどの時点で行われたかである。調査成果に記したごとく、基礎礫群は、礫群より一まわり大きい掘方を伴なっている。かつその掘方は墳丘の盛土を穿っている。墳丘への盛土が一定進んだところで構築されたのは事実である。

本古墳が、ほとんど盛土によって築かれていることは確かだが、旧地形（地山）と盛土が具体的にどのような関係になっているか不明な点が多い。しかし、調査成果と周辺の自然地形を総合的に検討すれば、その概要は理解できる。古墳の東側と西側の自然地形の標高は、東側が約28m 程、西側が19～21m 程である。概ね水平距離が200m で 7 ～ 9 m 程の比高差がある。基本的には、西下りの緩傾斜地に古墳が築造されていると見てよい。調査によって地山が確認できたのは、後円部の東側部分であり、その標高は25m 程である。現在、前方部頂の標高は36m 程であり、前方部の高さは13m 以上であることからすれば、墳丘の大半は盛土で築かれていることとなる。本墳の段築数も未確認であるが、墳丘遺存部の地形から推測すれば、3 段築の可能性が高く、標高25m あたりに段築第 1 段、29m あたりに第 2 段目が想定できる。したがって、段築 2 段目以上が盛土による築造ということとなろう。

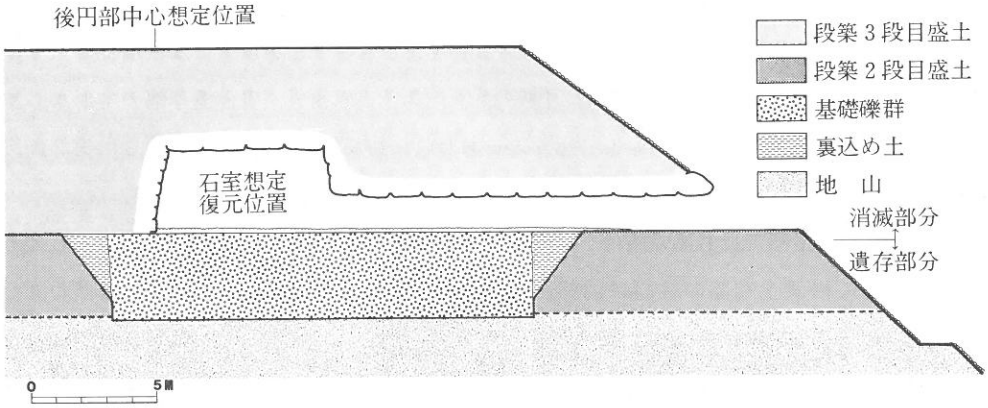
基礎礫群の検出部で最も高い所は、62－1 トレンチで、後円部残丘斜面に検出したものである。ここでの礫上端部の標高は約28.5m であり、段築 2 段目テラス部の高さに概ねあたる。基礎礫群の構築は、墳丘第 2 段目の盛土終了後行われたと考えるのが最も自然であろう。また、墳丘 2 段目の盛土と 3 段目の盛土は、部分的な観察ではあるが全く異質な土を用いている。前者は粘質性が強いのに対して後者は砂質土を基本としている。この盛土の差異も、

墳丘２段目と３段目の土盛りが別工程において実施されたことを窺わせる。

さて、このように墳丘第２段目盛土終了後穿たれることとなった基礎礫群の掘方位置は、本墳の長軸方向ではほぼ後円部中央に、短軸方向では中央付近から東側に片寄っている。これは、基礎礫群の上に築かれる横穴式石室の開向方向が東（推定Ｅ14°Ｓ）に設定されたことにほかならない。そして、おそらく石室の奥壁は古墳の中軸線を基準に据え付けられたものと思われる。掘方の大きさは、検出面では東西18.5m、南北8.5m の長方形であるが、検出面そのものが墳丘２段目から60～80cm 程削平されているため、本来はさらに大きかったはずである。推定すれば、東西20m、南北10.5m 程となろう。

掘方の掘削は、各辺ともまず角度をもって掘り、その後、垂直に掘り下げている。底面の高さは極く一部でしか確認できなかったが、標高25m である。したがって、その深さは62―１トレンチの後円部残丘に認められる礫上端からすれば3.5m を測ることとなる。また、底面は地山をわずかに掘り凹めている。今回、底を確認したのは、掘方東北部であり、前述したように、古墳が立地する自然地形が西下りであるため、底の全面が必ずしもこの深さで地山に到達できるか否かは不明なところではあるが、基本的には地山に到達するまで掘削を行うことを意図した施設であると考えたい。

掘方の掘削完了後、礫を積み重ねることとなる。使用する礫は、長さ30cm 程、幅20cm 程の亜角礫が多く、材質はチャートである。色調は青味がかったものが多い。このような石材は、本墳より３km 程南の宇治川川床で比較的良く見受けられる。礫は、底面より積み重ねられているが、一挙に行なわれたものではなく、何回かの小工程があったらしい。すなわち、３～４段礫を積み重ねた後、砂質土系の土砂で礫間の間隙を埋め、さらに次の工程へと進んでいることが、土層断面の観察から窺えるのである。この小工程の回数を復元的に推測するならば、７回前後となる。また、礫群は底から上端に至るまで、ほぼ垂直に近く積み重



第20図　二子塚古墳の石室構築方法想定図

ねられているため、上にゆくほど、掘方との間に空間が広がることとなる。したがって、この空間には粘質土系の土砂を裏込めとして充塡している。礫の範囲は概ね、東西17m、南北6.5mの規模となり、掘方より一回り小さい。

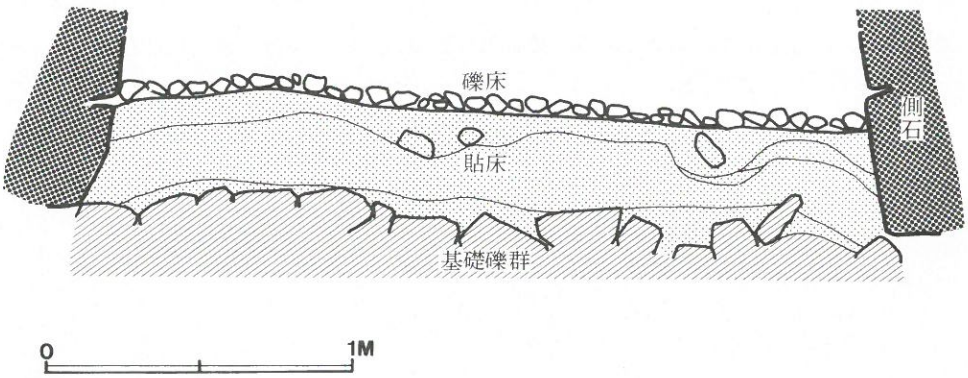
このように、基礎礫群は、墳丘築造過程において横穴式石室の下部構造として構築されたものであり、巨大かつ入念な造りの施設であることが判明した。本例のような施設の全容が一定解明されたのは例がなく、大型の横穴式石室の構築に伴う下部構造の具体例として重要な意味を持つものと考える。

（横穴式石室の復元）

二子塚古墳の後円部に存在した主体部が横穴式石室であったことは、大正年間の後円部破壊を見聞した方々からの証言や西方寺に存する石室使用石材、そして基礎礫群の構造から判断して間違いはない。現在、墳形や埴輪より考え得る本墳の年代が6世紀前半であるので、横穴式石室としては、山城国では古式のものである。石室が消滅している現在、その具体像を知ることは永久に不可能ではあるが、わずかな手懸りをもとに、その内容を窺いたいと考える。

まず、石室と基礎礫群の関係である。これを復元するのに良い事例として、奈良県の市尾墓山古墳がある。6世紀初頭に築造された全長65mの前方後円墳で、後円部に片袖式の横穴式石室が内蔵されている。この石室下部に基礎礫群が確認されている。下図のように、石室の基底石は基礎礫群の上に設置され、石室内部には貼床が行なわれている。この事例から判断して、二子塚古墳においても同様の造作が行なわれていた可能性が高い。すなわち、石室の基底石の高さは、現在確認できる礫群最上端にあったとしても、石室床面はさらに数十cmは高かったと思われるのである。

次に石室の規模の問題である。これを、基礎礫群の大きさと墳丘における位置とを中心に



第21図　市尾墓山古墳石室下部の構造（報告書に加筆）

想定してみたい。長さについてである。基礎礫群の東西長は約17m である。玄室奥壁を後円部中心に設定したと仮定した場合、奥壁から基礎礫群東端までは13m となり、この距離に羨道・玄室を想定する案がある。但しこの場合、昨年の62―２トレンチで検出した後円部２段目斜面から後円部を復元すると、羨門は完全に墳丘内に埋もれてしまい、石室は墳丘に開口できない。したがって、墳丘に開口するためには、羨道が基礎礫群を超え、さらに９m 東へのびなければならないこととなる。このもう一案での石室長は21m である。現時点では後者をとり、京都府下最大級の横穴式石室を復元したい。

石室の石材については、一部が西方寺本堂裏の庭石として転用されていることを前述した。現存する庭石のうち、チャート質のものは70点ほど認められる。この大半は長さ0.5～１m 程の大きさの石で、１点だけ高さ3.2m、幅2.6m、厚さ1.8m 程の巨石がある。通常、この時期の横穴式石室は、側石にさほど大きな石材を使用しないため、庭石の主体を占める石材がかつて側石に使用されていたものと思われ、１点のみ現存する巨石が天井石の一部である可能性が高い。

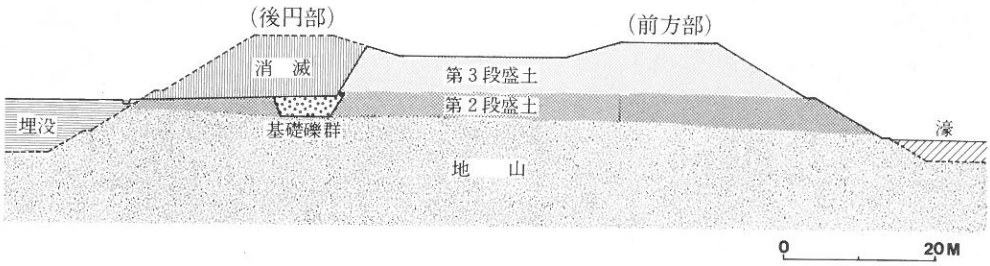
（基礎礫群構築の意味）

最後に、二子塚古墳がなぜ石室下部施設として基礎礫群を構築しなければならなかったのか、考えておきたい。

まずその前に、横穴式石室の下部の状況が比較的明らかとなっている事例を２例示す。

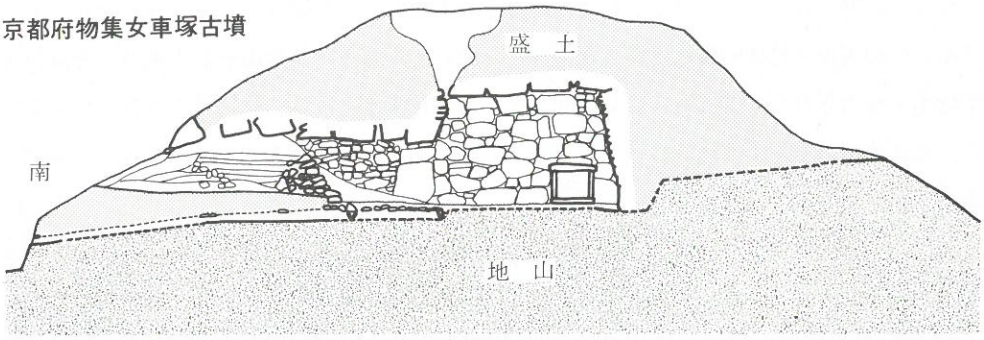
一は、京都府向日市に所在する物集女車塚古墳[註10]である。全長45m 前後の前方後円墳で、６世紀中葉に築造されたものである。墳丘は２段築成であり、石室は２段目に開口する。石室の床面は礫床となっているが、この礫を取り除くと地山を穿った排水溝があり、石室基底石は地山上に設置をされている。すなわち、物集女車塚は墳丘１段目を地山成形し、２段目を盛土して築造されているものであり、石室は地山を若干穿って構築されているのである。

もう一は、奈良県高取町に所在する市尾墓山古墳[註11]である。平地に築かれた全長65m の前方後円墳で、６世紀初頭の築造である。墳丘は２段築成で、石室は２段目に開口する。石室



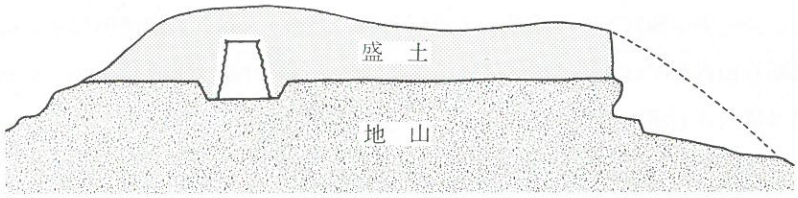
第22図　二子塚古墳墳丘縦断面模式図

京都府物集女車塚古墳



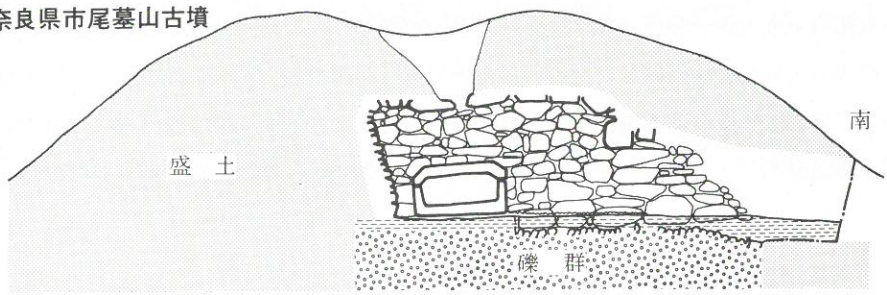
(石室断面)

0 5M



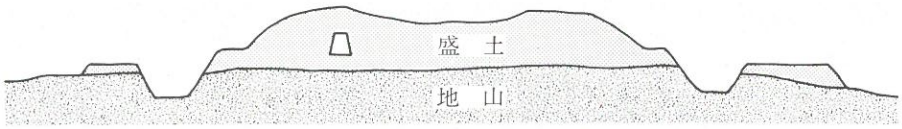
(墳丘縦断面模式図)

奈良県市尾墓山古墳



(石室断面)

0 5M



(墳丘縦断面模式図)

第23図　横穴式石室構築方法の２例(各報告書に加筆)

の礫床を取り除くと厚さ30cm程の貼床があり、その下に平均20～30cm大の割石層が認められる。石室基底石は、この割石層上に設置されている。割石層は、石室全体にわたっているが、その規模・具体的構造は明らかでない。墳丘1段目下半が地山成形であり、それ以上が盛土で築造された古墳である。したがって、石室は盛土中に開口することとなっている。市尾墓山古墳の石室下部構造は二子塚古墳と同様であり、現在、畿内における唯一の類例である。

横穴式石室を構築する場合、通例は物集女車塚古墳のように地山をベースとし、石室の安定を図っている。しかし、不安定な盛土中に石室を構築しなければならないものについては、石室下部に何らかの対策をしなければ石室が安定せず、市尾墓山古墳や二子塚古墳において認められる基礎礫群は、この必要性から造られた施設と思われる。二子塚古墳の基礎礫群が地山から積み上げられているのは、まさに地山の安定性を伝えるためであろう。

但し、盛土中に横穴式石室を築造する場合での下部構造は、基礎礫群だけではない。群馬県綿貫観音山古墳では、石室の地業として版築様の状況[註12]が確認できたということであり、基礎礫群は横穴式石室の基礎構築方法の一例といえるのである。

（結　語）

以上、今回の発掘調査で知り得た事柄の概要を報告した。二子塚古墳の主体部に係る調査については、一応今年度においてその目安がついたものと判断している。部分的な調査ではあったが、横穴式石室の下部構造の内容を把握することができたとともに、かつて存在した石室が京都府下最大級の規模であったことを高い可能性の中で推測できたことにより、この古墳の歴史的・文化財的価値がいかに高いものであるか再認識できたように思う。二子塚古墳については、次年度以降も墳丘等の調査を行い、その全容解明の努力を続けてゆきたいと考える。関係機関ならびに各位のご指導とご協力をお願いし、本報告のおわりとしたい。

（註）

註 1. 梅原末治「五箇庄二子塚古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』第14冊、京都府、大正12年。

註 2. 「二子塚古墳外濠発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集、宇治市教育委員会、昭和62年。

註 3. 「五ケ庄二子塚古墳昭和62年度発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第11集、同上、昭和63年。

註 4. 測量については、古墳部分を250分の１で地形測量をするとともに、周辺部分については本市道路台帳図よりの拡大図化を行った。また、測量図の復元性を考慮し、２点の埋標を行った。

註 5. 「寺界道遺跡発掘調査概要」、註２に同じ。

註 6. 『宇治市史』第一巻、昭和48年。

註 7. 『鏡と古墳』―景初四年鏡と芝ケ原古墳―、京都府立山城郷土資料館他、昭和62年。

註 8. 註２に同じ。

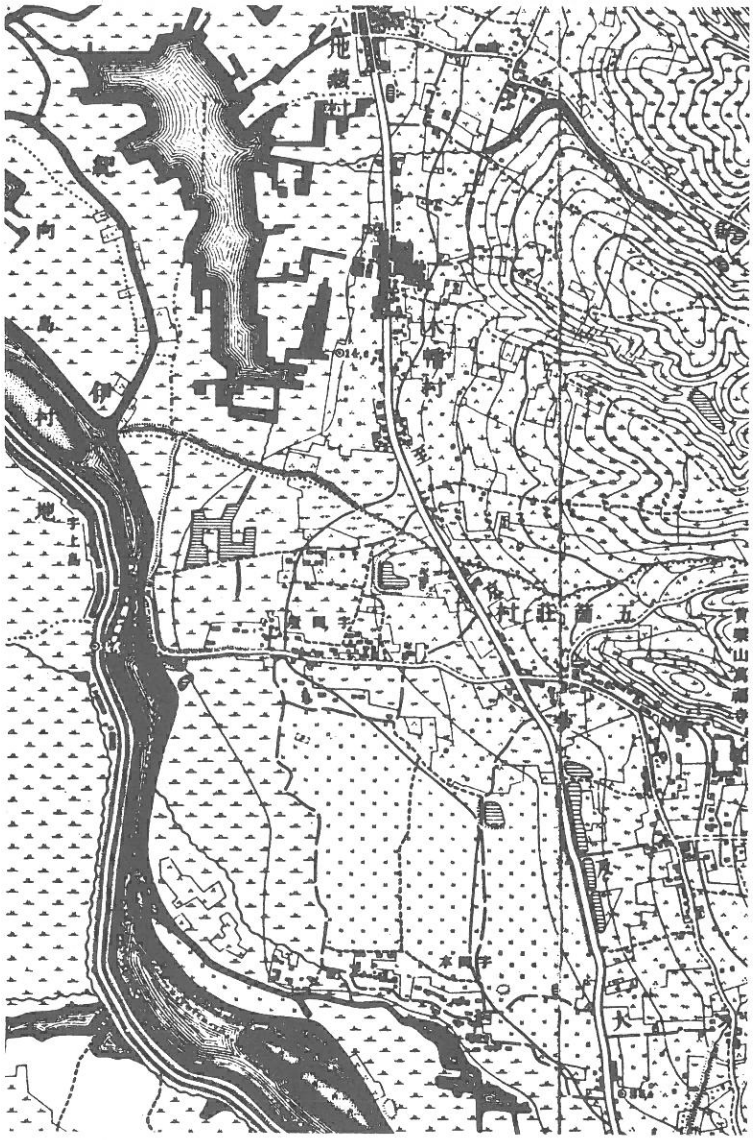
註 9. 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64－２、日本考古学会、昭和53年。

註10. 『物集女車塚古墳』「向日市埋蔵文化財調査報告書」第23集、向日市教育委員会、昭和63年。

註11. 『市尾墓山古墳』「高取町文化財調査報告」第５冊、高取町教育委員会、昭和59年。

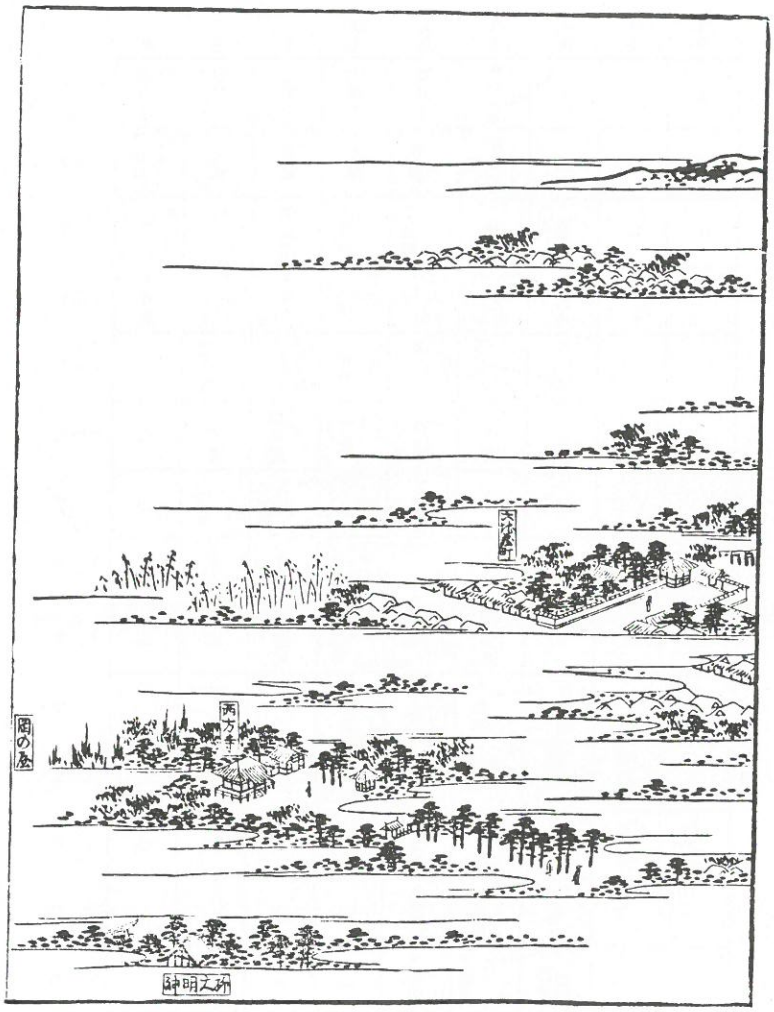
註12. 群馬県教育委員会　梅沢重昭氏のご教示。

八、『一万分の一仮製図』（明治二十一年測量）

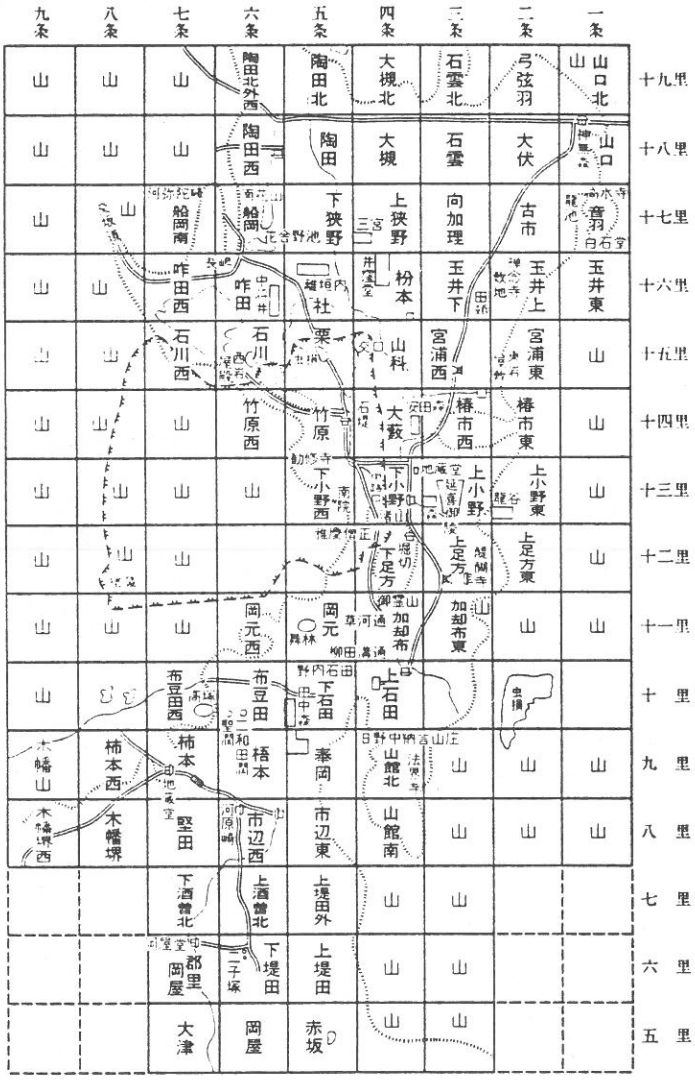


「この測量に二子塚古墳は、L字形に残る濠とその外側の堤が表現されている。但し堤は、濠を越えさらに北側へとのび、かつては、現状より良好に堤が残っていたことが理解できる。」

七、『都名所図会』巻五　安永九年（一七八〇年）



「この図絵には二子塚古墳の記載はないが、西方寺本堂の裏に林が描かれており、ここが古墳にあたると思われる。」



「本古図はすでに現存せず、また、製作年代も不明である。二子塚古墳は、本古図の六条六里の下堤田に記載されている。但し、二子塚については、18世紀以後の書き込みの可能性がある。」

遺物ニ就イテハ如上後圓部ノ際注意ヲ加ヘタリト云フモ僅ニ一個ノ異形埴輪片ヲ獲タルノ外、石室ノ部分ヨリハ何等ノ發見物ナカリシト。蓋シ上述ノ狀態ヨリシテ、本墳ノ主躰ハ早ク盜掘ニ遇ヒ、上部ノ凹所ノ如キ當時天井石ノ落下等ノ結果生ゼシモノニ外ナラザルベキカ。右ノ埴輪片ハ西方寺住職ヨリ京都帝國大學ニ寄贈シテ今マ文學部陳列館ニ藏ス。圖版第三十五ノ三ニ示スハ其ノ寫眞ニシテ、徑七寸ノ圓筒ノ上部括レテ該部ニ太キ突帶アリ、コレヨリ上部再ビセバマリテ更ニ一帶ヲ繞ラシ器臺ヲナセルモノ、現存高サ約八寸五分ニシテ上ヲ缺ク。而シテ圓筒部ニハ上邊ニ近ク徑一寸五分ノ二孔ヲ貫通セリ。形狀ヨリ察スルニ埴輪偶人ノ下部ナルコトホゞ疑ナシ。タゞ其ノ主要部佚失セルヲ憾トナス。

之ヲ要スルニ本二子塚ハ其ノ制前方後圓墳ノ整美ナル類ニ屬シ、上代有力者ノ奥城タルコトヲ示セルモ、今マ破壞セラレテ少ナカラズ其ノ面目ヲ失ヘルノ狀ニアリ。卽チコヽニ概要ヲ錄シテ、其ノ保存ノ法ノ加ヘラレン事ヲ期待ス。若シソレ塚ノ營造年代等ニ至リテハ墳ノ主躰ガ破壞セラレ副葬品ノ徵スベキモノナキ現狀ニアリテハ、タゞ外形ヨリソノ恐ラク我ガ墓制ノ最盛期ニ當ルベキヲ推測スルニ過ギザルナリ。

第六　五箇荘二子塚古墳

二子塚古墳ハ宇治郡宇治村大字五箇庄西方寺ノ境内ニアリ、堂ノ背後ニ位置ス。南面ノ大ナル前方後圓墳ニシテ、其ノ存在ハ早ク、水戸彰考館ニ蔵スル山科郷古圖ノ六條六里下堤里ニ特筆セラレ、マタ台記久安六年ノ條ニモ其ノ名見エテ古クヨリ著名ナルモノ、今モナホ隆然タル封土ヲ遺存シテ府下ニ於ケル宏大ナル墳墓ノ一ヲナス。タヾ大正三四年ノ交後圓部ノ土砂ヲ採掘セル結果、此ノ部イタク破壞セラレテ、完形ヲ存スル部分ガ後ニ岡屋關白近衛兼經ノ墓ヲ營メル前方部ノミニ限ラル、ニ至レルヲ遺憾トス。今マ委員ガ破壞ノ當時實地ニ就テ見聞セシ處ニ本キ、其ノ形狀ヲ錄スルニ、宇治川東方ノ沖積臺地ニ營造セル墳墓ハ前後ノ長徑一町ヲ超ヘ、前方部ハ其ノ西南ノ二面ニナホ湟ヲ遺存シテ、本來ノ頗ル完備セル墓制ナルヲ察セシム。後圓部ハ委員ノ同古墳ヲ訪ヘル大正四年五月ニハ既ニ土砂採掘ノ爲ニ其ノ大半ヲ失ヒ、僅ニ西半部ノ切斷面ヲ見得ルニ過ギザリシガ、其ノ示ス處、基底ト思ハル、部分ヨリノ高サ數間アリ、上部ニ大ナル凹所ヲ存シ、マタ凹所ノ下方ニ當リテ稍深位ニ大石三四ノ埋沒シテ墳ノ主躰ノ一部タルヲ思ハシメタリ。而シテ此ノ封土ノ破壞部ニハ埴輪圓筒ノ破片散在シ、マタ礫石ノ遺存スルモノ多カリシヨリシテ當初葺石ノアリシコトヲ肯定シ得タリ。

墳ノ内部ノ構造ハ上記後圓部ニ埋沒セル大石其ノ一部ヲナスベキコト容易ニ想察セラレシ處ニテ、恐ラク石室ノ天井石ニ相當ルベキヲ考ヘシメシモ既ニ、破壞セラレタル部分アリ、且ツ當時殘存ノモノマタ配列整齊ヲ缺キテ其ノ構造ヲ明ニナシ難カリキ。依リテ試ミニ發掘ノ事ニ關與セル西方寺住職ニ就イテ糺セルニ、後圓中央ノ土砂ノ採掘ニ當リ、基底部ニ近ク小石ヲ積ミ重ネタル室アリ、上部ヲ覆フニ大石ヲ以テシ、マタ周圍ニモ大石ヲ置ケル構造部分ヲ見タリ。今マ存スル大石ハ其ノ一部ナリト告ゲタリ。尤モコノ室ハ發見ノ當初既ニ原形ヲ損セルノ形迹アリテ其ノ詳細ヲ究メ能ハザリシト云ヘバ、今マ室ノ形式ノ如何ヲ確ムルニ途ナシ。タダシ遺存ノ用石ノ大サヨリシ、マタソノ位置ノ比較的深ク、後圓封土遺存部ノ西側ニ同ジ大石ノナホ二三見ユルニ參酌スル時ハ石室ノ構造ノ大規模ナリシ事實ヲ認ムベク、此ノ點ニテハ普通我ガ古墳墓制ノ後期ニ盛行セリト云ハル、圓塚ノ横穴式石室ト近キモノナルヲ感ジタリ。記シテ參考ニ供ス。

三、『山城名勝志』巻第十七　正徳元年（一七一一）

○二子陵　探岡屋村東西方寺彌陀次郎ト呼西
有陵圓丘二相並是二子陵歟

台記云久安六年九月二十六日雞鳴後参西殿禪閤居所頃之乗輿出御余乗車従之兼長同車棹船渡河於東岸禪閤移車余連車此間降雨比
至二子陵邊天曙過此陵未至櫃川見禪閤御車右邊有一鹿再見之忽然不見奇問僕従各答不見疑春日明神守禪閤
歟辰時入洛

千種云俊秘抄連歌部山城二子つか　おに柳　伏見　宇治殿
俊頼髄脳　おほつかなたれとかたらんふたこつか
はゝその杜やしらは新留らん　きんすけ

四、『山城名跡巡行志』第六　宝暦四年（一七五四）

○二子塚　在岡屋宇治街道路傍西方寺南西　俊頼朝臣歌

岡屋村名在宇治街道西古街道也　詠和歌

一、『殿　暦』（筆者　藤原忠実）

康和五年（一一〇三）七月

廿四日、辛丑、天晴、夜中許夕立、丑剋許着衣冠、御前遲參間、中宮權大夫（藤原能實）談、（中略）二子墓程車軸打〔折〕、其間暫遲々、渡宇治橋間、前駈・随身下馬、余舁放車、渡橋後懸牛、（後略）

二、『台　記』（筆者　藤原頼長）

久安六年（一一五〇）九月

廿六日己亥、雞鳴後參西殿禪閤居處、頃之、乘輿出御、余乘車從之、兼長同車棹船渡河、於東岸、禪閤移車、余連車、此間降雨、比至二子陵邊天曙、過此陵、未至櫃川、見禪閤御車、右邊有一鹿、再見之、忽然不見、奇問僕從、各答不見、疑春日明神守禪閤歟、辰時入洛、（後略）

参　考　資　料

一、『殿　　暦』

二、『台　　記』

三、『山城名勝志』

四、『山城名跡巡行志』

五、『京都府史蹟勝地調査会報告』

六、『山城国山科郷古図』

七、『都名所図会』

八、「明治27年１万分の１仮製図」